
BSK—British Steel Knights

がりゅ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B S K | B r i t i s h S t e e l K n i g h t s

【Nコード】

N 7 9 2 2 V

【作者名】

がりゅ

【あらすじ】

時は流れ、戦争は人ではなく、機械を交えての戦闘に進化した。世界はそれを認め、人型殺戮兵器、通称A Aの開発に世界は躍起になった。

大英帝国はその流れには乗らず、現在から十年前まで頑なに沈黙を保っていた。だが、新国王の就任と共に軍事的行動を開始、A Aを持たぬ国に関わらず、敵国を圧倒。

王を手に入れた国と民は、更なる軍事行動を開始すべく、軍人を募集した。

これはその志願兵の話である。

第一射 軍人

大英帝国

それはイギリス、であり、過去に最強の王が居た国
円卓の騎士と最強の王が治めた国

しかし、その栄光も実の息子に墮とされる
王は独り、眠りにつく
やがて目覚めるその日まで

「アーサー王とは、やがて目覚め、この国を統治する！それが過去に決められた結果であり、これから起きる事象である！

天文学の点から見てもそれは明らかだ！さあ！我が帝国の栄光を見るのだ！確かに、外国諸国に比べ、我々の国は遅れている！だがそれも瑣末なものだ！」

今の国王が就任してから既に幾千の戦を経ている。

勿論、イギリスの疲弊も大きく、唯の施政者では不満は怒涛のごとく出ていただろう。

だが、今の王は違った、結果を出したトップは民に認められ、王も民を認めた。

長い戦乱の世界を生き抜く為の王を、民は見出したのだ。

… 此処は倫敦に建てられた軍事訓練所だ、丁度設立100年目の節

目もあつてか、国王様自ら演説に来てるんだが…。

アーサー王…か、確か国がまた混乱に落ちるとき、王は眠りし場所で目覚め、国を鎮めるだろう…、そんな眉唾物の物語を信じている王様がまだ居たとは…。

それが本当だったら王はとくに目覚めてるだろう、17年前、俺が生まれた年…その年から世界各国は混乱が続いているからだ。

「我が帝国は伝説の王がついているのだ！この世界の戦争に勝てないわけがないだろう！」

技術は発達し、戦争は人自身ではなく、機械を操る戦争へと変貌させた。

………アサルトアーマー人型殺戮兵器通称AAは戦車や戦闘ヘリのような戦闘力は勿論のこと、ありとあらゆる環境に適し三次元での行動を可能にした。

大きいものは高層ビル程のもあるし小さいものは2m程の大きさしかない。

アメリカの変態がそれを開発してから、爆発的に普及したその兵器はいまや戦争の主力となっている。

だが、イギリスは初代帝国王の意向により、開発をしなかった。それは丁度500年前の事だ。

二代目三代目もその遺志をついで開発をしなかった。

そして10年前…今の国王、つまり今演説をしている奴だが、軍部を重視し戦争を肯定する奴のお陰で研究が始まった。

990年ものブランクは大きかった。

今の世界の最新鋭が10としたら、イギリスは5しかない。

いや、褒めるべきだろう。僅か十年で此処まで迫れたことを…。

此処にいる国王は民が認める通り手腕は確かのようにだ。

だがイギリスは今、人手不足が深刻な問題になっている。

研究に人員を割きすぎると第三次世界大戦の甘い蜜を吸えなくなる、モラルの面も考慮して軍人を募集しているのが現状だった…。

研究しつつ、戦争をする…

馬鹿なことをしているがイギリスは弱い。

これしか方法がないのも確かだ。

ちらつと現国王であるシュバルツ王が俺を見た。

そんな錯覚を覚えた。

そんな馬鹿な、ここには1000人以上の志願兵がいるんだ、高校の教室に1000人以上詰め込まれているんだ、唯の偶然だろう。

「さあ！立ち上がるのだ勇敢な英国市民…いや、軍人よ！祖国に栄光をもたらすのだ！」

俺の疑問を吹き飛ばすように王はなにもないように檄を飛ばした。

周囲、というか俺以外の999人がおおーーーーーっ！！と氣勢を上げる。

軍人に成る事を決意した一ヶ月前の俺を殴りたい気分は無性になった。

一ヶ月前

俺は軍人に成る事を決意した、

俺の家系、ペンドラゴンの家柄は軍人の家系だ。

キールド・ペンドラゴン…親父の名を継いで俺は17年前誕生した。親父は古臭い感覚をお持ちのようで俺を5歳の頃からボコボコにしてくれた拳句、口を開けばやれ軍人はだの、男なら祖国を守れとそれしか言わなかった。

だが、親父は俺が中学に入った一年後他界した戦死だった…死体は無かった。AAを使い基地に突貫して、基地を破壊、そして死んだのだ、レーザーの一本で死体は無くなる。

だが、親父が最後に残した言葉は「俺の名を継げ」という、まああゝる種軍人に成れる的な言葉を残された。

母は軍人になったら帰ってきなさいと言っただけでイギリスの片田舎に引っ込んでしまった。

親父の顔を忘れることが出来なかった、それとなくという理由で俺は軍人になる決意をした、ありきたりな理由でつまらないが、これが現実だ。

まあ、なるからには頑張る。

というより親父が英軍特殊技団の大將に登り詰めたのだ、その上を行かなくては親父が浮かばれない。

俺は、AAを操る事を決意して、一カ月後に臨んだのだ。

第一射 軍人（後書き）

キャラの説明は次回お送りします

登場人物紹介・A A紹介（前書き）

適当ですのであしからず。

出てきた人はどんどん更新するつもりです

8月25日、A Aの全長と新キャラ更新。

9月12日、新キャラ更新。

ただ今確認しましたが何故かシュバルツ王がヴァルハラ王になって
ました。

訂正します。

登場人物紹介・A A紹介

キリート

親父が死ぬまではウーサー・ペンドラゴン
最高の軍人であり、特殊技団——BSKの大将でもあった親父の名
を継いでキリート・ペンドラゴンと名乗る

趣味はカフェモカを飲むことと一人でチェスをすることだがチェス
は余り上手くない

AAの操作技術はそれなりであり、白兵戦では生身でAAを着込ん
だ女性と打ち合えるほど

格闘最強の理由は親っさんのお陰

容姿は金髪で短髪の普通の男であり、遠くから見ればイケメンに見
えるかなぐらいのレベル

身長は175cm体重は72kg

普段服は軍服

姓はキリート・ペンドラゴン

ベディヴェア

親父の弟子みたいなものであり、過去、主人公と遊んでいた親友
だが、女だ

今では上司であり、A Aを使いこなす男顔負けの強さを持つてる
だが、女だ

専用のA Aは白銀の色であり、射撃、格闘なんでもござれ
だが、女だ

B S Kの大将
だが、女だ

趣味は街に出て買い物することとA Aを見ること
容姿は此れまた金髪で身長は主人公より低い
普段は小型のA Aを着込んでおり、コートを纏っていた
身長は167cm、体重は――kg

姓はベディヴェア・サー・ランスロット

ジョーズ

白人巨漢のヤバいやつ
異常にデカイ

縦は190cm横は100cm超体重は89kg
とにかくデカイ

スキンヘッドで髭面
なのにパイロット

B S Kの副大将
普段着は軍服

姓はジョーズ・ワンダー

レンド＝ボブ

黒人

だがイギリスで生まれた

異常にデカイ

スキンヘッドで髭面

縦は2 m、横は80 cm超体重は91 kg

パイロット

普段着は軍服

ついでに言うと二人共趣味は珈琲を飲むこと

姓はレンド・ミテック

ミード

赤髪ショートカットの活発な女性

実年齢は2 歳

技術班切つての天才

普段着は作業服

趣味はAAいじり

姓はミード・トゥーユー

シュバルツ王

有能な王ということでは有名。

年老いており既に60を越える。

白髪が殆どを占めており、髭が風格を見せる漢。

ついでに言うとAAを駆って戦場に出ることもしばしばあり、その時は近衛兵団が連れ添う。

イギリスの王様と言ったらアーサー王とシュバルツ王だろという声
が一般的であるぐらいである。

姓はシュバルツ・ユーストール。

ダング

近衛兵団団長。

大柄な身体をした熊のような人、髪色は茶髪。

特技は訓練、公私分別を胸にぶら下げた様な御人、キリート曰く無人島に行くならコイツが一番頼りになり、一番行きたくない、とのこと。

機体はただいま破損状態、後方での指揮をしている最中。

ここからキリート隊に移ります。

スペッツ

童顔、身長は160後半、年端もいかぬ少年ではなくキリートより一個上。

カリスマ性というよりは保護欲に駆られる為、男女問わず彼の命を守ろうとしたりしなかったり。

常に5人組を組ませ、レールガンを筆頭に重火力兵機を好んで使う傾向がある。

ファンクラブも有るという噂。

実を言うとシュリーの事が…………。

スペッツ・リンドが本名。

シュリー

赤髪の活発そうなツインテールの女性。

身長はスペッツと同じくらい、年は20丁度の新人。

AAの適正を認められ1年で特殊技団に配属、仲間との協力こそが最大の策戦だと公言している。

残念ながらシュバルツ王の考えとは真逆だが王はそれを良とした。

キリートに一目惚れしてしまった乙女（微笑）

シュリー・ワトソンが本名。

アルティ

青髪だがピアスはしていない、絶対に。

年は19だが狙撃手として配属された、軍歴は3年というベテランの域に達しそうな少女。

戦場ではキリートの後ろで待機している、光の明滅が合図で狙撃班の一斉射撃を開始する。

寡黙な死神で海軍では有名だった経歴も。

こんな感じになってますがまだまだキャラは出てきます。

次に現在分かってるAAの種類

キリート・ペンドラゴン専用機（赤）

全長94m、重さ2t

主兵装は第3話の時点で

700口径ハンドガン

原型はD、E

ナイフ 二本

副兵装

なし

ベディヴェア専用羽織A A

全長1,7m重さ20kg

主兵装

副兵装

共に無し

効果は筋力増強、視力の上昇

ジョーズ機（白）

全長100m、重さ3,5t

主兵装

700口径グレネードランチャー

原型はM32

副兵装

300口径ロケットランチャー

原型はジャベリン、中身はクラスター爆弾

レンド機（黒）

全長100m、重さ3t

主兵装

700口径アサルトライフル

原型はSVDドラグノフ狙撃銃から

ダング機（銀）

全長99m 重さ2.5t

主兵装

700口径ショットガン

原型はベネリM4

なお、ギネヴィアは説明しません。

気にしないでください、伏線など有りはしませんw

第二射 出立

イギリスは島国であつた、だが何もしないわけではない、まずは北を攻めた

アイルランドを属国とし、周辺のフランス、ドイツ、スペインを一気に攻め立てた

相手はA Aを保有、イギリスはA Aを持っていなかった

世界はイギリスの敗北だと、アイルランドはA Aを持っていなかったが、これまでだと

だが、シュバルツ国王はその戦力差を物ともしなかった

結果は勝利、A A 5台を入手し、それを種に力を黙々と蓄えたほんの十年前であり、国王就任一ヶ月で起こした奇跡であつた

「キリート・ペンドラゴン！」

「はっ！」

「貴様は汗を流した後、基地に来てもらう。覚悟を決めておけ」

軍に入隊し、一ヶ月

基礎訓練を終え、ようやく新兵として配属されることになった。

…だが、特殊技団への道のりは遠い、空軍を経験し、さらに陸軍の訓練を受けたものが希望と推薦によつてA Aという乗り物に乗ることが許される隊に所属することができるのだ…。

が、人材不足の影響か、いくつか可能性がある

一つは空軍で活躍して陸軍を無視して特殊技団に入る方法。
もう一つはその逆だ。

そして、王の推薦を受けて入団するという方法…。

俺自身、そうなればいいな、なんて事を思うのだが推薦を受けるのはアイスランドの片田舎では無く、お膝元の倫敦で鍛えあげられた兵士だ。

俺が推薦された暁は倫敦の特殊技団に入団希望の兵士に滅多殺しにされてしまう。

そんな馬鹿なことを考えているとアイスランド屈指の巨大建造物である軍事施設が目の前に出てくる。

メインエントランスをくぐり、受付の女性に上官の名前（女性）を告げると右のエスカレーターにお乗りくださいと言われ、素直に乗り込む。

円柱型に進化したそれは高速で上昇、その後さらに加速して右に移動を開始した…。

エスカレーターに乗り込むこと30秒

到着したことを教えないつもりだな、と勘ぐるぐらい静かな到着と共に扉が滑らかに開く。

…一応軍服を着ているが新兵には変りない、何処の誰が来てるのかは分からないが、粗相をかました瞬間アウトだ。

扉の前で一度深呼吸をする…そして、ノックをしようと拳を固めた瞬間。

「入りましたえ、キリート・ペンドラゴン君」

「はっ！失礼します！」

タイミングを見計らったかのように声がかかる。振り上げた拳の行き場をなくしたが堪えて拳を下ろす、男たるもの振り上げた拳はただで降ろしてはいけないのに。シヨックを隠せないがなんとなしに俺の頭は冷静に観察をしていた。声は初老の男性の声だ、だが、それだけで情報が圧倒的に足りなさぎる

潔く入ることにした…。

が、

部屋に入ると目につくのは豪華絢爛な装飾品と調度品、目を奪うのは初老の老人と脇に控える美人秘書らしき人その後ろで基地を俯瞰し展望できる巨大な窓。

「いらっしやい、キリート君。どうだね、茶でも飲むか？」

「いえ、私は呼ばただけですから」

「堅いな、おやじさんにそっくりだ」

「……………」

巨大な椅子から立ち上がり、秘書らしき人に合図をしてから中央に鎮座するテーブルを挟んだ椅子の一つに座った。

「さあ、座りたまえ」

……………王の威厳があつた。

素直に俺は現国王のテーブルを挟んだ椅子に座る。

座ると同時に珈琲を出す秘書らしき人、それに軽く会釈をして王を向く

「ふむ、おやじさんの性格だけじゃなく顔も似ているな、軍の雰囲気には慣れたか？」

「いえ、まだ訓練についていくことすら儘なりません」

正直に…ほんの少し謙虚を入れて答える、だがシュヴァルツ王はその返答すら楽しいのか無邪気に笑みをこぼして俺を見つめ続ける。

「少し訓練を見させてもらったが、そうとは見えなかったな。銃の腕は勿論、敵兵の無力化、近接戦闘etcetc、おやじさんが見たら狂喜乱舞するだろうな」

「……………まだまだ経験が足りません」

「経験なら積みばいい。才能は持ち得るものしか持たん、そうだろう、一ペンドラゴン《……………》」

「他にも素質が有る方は居るか」と

「伸びる人は極少ないぞ」

「ですが…」

つい言葉が詰まる、目の前の男は一国を率いる頭でもあり、実力で民の信頼を勝ちとった漢だ。

「私は君を買っているのだ、キリート君。単刀直入に言うぞ。
君を特殊技団への推薦にする」

息を吞むが隠す、大方バレてるはずだが一縷の望みに願う。
俺は確かに入りたいとは思っていたが話が上手すぎる。
必死に抵抗を始める。

「それは努力してきた人達に…」

が、それは王の一喝で容易く崩れた。

「キリートペンドラゴン！」

「はっ！」

「君を推薦する。異論は？」

鋼のように堅い意志、琥珀色の瞳はあまり直視したくない色をしている。

親父のような瞳の色、人殺しの目はそのすべてが俺の瞳を貫いていた。

その重圧に、俺は屈した。

「……………ありません」

「よろしい。では、今から倫敦に飛びたまえ」

「え？」

「君のA Aも用意してある、準備をして行き給え」

流石にこれは俺も反論をする。

「少し急すぎでは…」

「さあ、行き給え」

「ですが…」

「行き給え」

「……………了解しました、我が王よ」

だが、またしても瞳の重圧に耐えることは出来なかった…いや、違う。逸らしたくなるような、まるで魔力のようなものが瞳に入るのを避けたのだ。

俺は典型的な返事をして椅子から立ち上がる、というよりそれしか選択肢は無かった

そのまま一礼をして扉から出ようとするが、

「なにをしてるんだね？A Aはこつちだ」

いつの間にか立ち上がったのか、社長椅子の後ろに開いている軍基地を展望できる窓の前に立っていた

王の呼び掛けを無視する訳にも行かないので窓際に向かい王の指差す空間に目をやる

蒼い空、灰色の基地、兵たちの掛け声、どれも十分な色彩を持って

俺の目に飛び込んできた。
だが、それ以上に、
真紅の色彩に目を奪われた。

それは一種の調度品、見る人の目を奪ってやまない芸術の一つ、
それを見て心を震わせた。

「王よ、これは…?」

「君専用の機体だ。と言っても殆どの隊員が持っているが、選別だ、
持って行き給え」

「有り難き心遣いです、我が王よ」

なるべく疾く行け

王の意図はそれだろう、だからこそ、王は此処までやった。
その考えを汲むため、窓を背に、王をみる。

「では、我が王よ。失礼します」

「うむ、さあ、行くが良い」

王は朗らかに、まるで息子を見送るように、優しい笑みで俺を見送った。

その目を逸らし、離し、千切り、コックピットにダイブする。

高さ500mから飛び降りる、落差は400m……

……死んだ。

落ちる速度と距離的にそう出した、だが、AAは凄まじい、瞬時にAAは上昇しホバリング、俺がコックピットに入ると同時に下への移動、威力を減衰して地面に立つ。

あつけにとられる、よもやこんな事をされるとは……しかも機械にだ。

相好を崩す、腹の底から笑う！

赤の専用機に目を奪われていた俺と同じ新兵もあつけに取られていた。

ひとしきり笑って、

「頼むぜ相棒」

ぽん、とコックピットを叩く。

それを合図に動力が動き出す！

説明だが、これの動力源は大本はほんの少量の鉱石から採れるエネルギーだ。

それで動力を作る炉を動かす、要するにつければ半永久的にエネルギーを作り出す永久機関というべきか。

戦闘ではそうはいかないが、まあそう考えてもらって大丈夫だ。

準備完了の文字を確認して、ブースターを起動、

まずは一步步こつ、そう思って足を動かそうとすると急に無線が入る。

「聞こえますか？キリート・ペンドラゴン殿、聞こえているようでしたら返事をお願いします」

声の主は女性、想像するに傍らに控えていた女性だろう。

俺は指示に従い、無線を返す。

「大丈夫です、聞こえてます」

それと一瞬の間を置いて美声が機体に響いた。

「無線は大丈夫のようですね、では機体にルートが設定されていますので、それを標に倫敦に向かつて下さい。」

武装は最低限の物しか有りません、無駄遣いはしないように」

「了解」

女性の説明を聞き終わるとコックピットの右の画面に立体的な地図が表示される、それと同時に自分の現在位置も表示された。ひとしきり目を通した後足を動かす。

俺は足を動かし二歩三步、その後ブースターを使用して高速移動を開始した

コックピットを開け、まだ穏やかな風を頬に受けながら、眼下を見下ろす。

基地が豆粒だ、人は極小の点だ。

みんな、上から見たら大差ない…。

俺は感慨深い念に包まれつつ、アイルランド英国軍基地を後にした。

その後、

「王よ、いいのですか」

「もとより、キリートは所属させるつもりだった、遅いよりは早いほうがいいだろう」

「王よ、貴方は冷静を失っていた」

「気付いてるとも、俺はキリートをペンドラゴンと呼んでしまった。あれは奴の名前であり、奴を呼ぶのはあれしか無いのに」

「王よ、では何故」

「いいのだよ、俺も、奴が死んだ以上もう長くない。奴の息子ぐらい、手塩にかけたっていいじゃないか」

「王よ、手塩にかけるのですか」

「そうだ、最高のパイロットにする。それが奴に報いるための最後の業だ」

「王よ、では何故、

ドイツやフランスの残党が多発する道を？」

「ははははははっ、決まってるだろう、

ペンドラゴンの恨みだ」

「王よ、狭い器量ですね」

「不敬罪になるぞ、ギネヴィア」

「王よ、これを許せば器量は大きいですよ」

「なら許す」

「それでこそ、王ですよ……シュヴァルツ王」

「そうか……ギネヴィア」

「はい」

「一戦の準備をしろ、このヨーロッパを俺の物にするぞ。いいな、ギネヴィア」

「直ちに」

……ギネヴィアが部屋を出る。
俺も、老いた、

さて、キリートよ。

お前はとう上がる、この道を。王を継ぐのはお前だけだ。
シュヴァルツを継ぐのはお前だ

第二射 出立（後書き）

はい、もう既に気付いた方も居ると思います。
名前は殆どあれですw

第三射 戦闘

旅は道連れ世は情け
されど来るのは鬼一人

「極東のコトワザなるものだったはずだが……なんか違う気がするぞ」

既にアイルランドを発つて3時間、通常ならば既に到着している時間を過ぎているがこれには訳がある。

アイスランドをまず南に、イギリスの北端をなぞりながらドイツ・フランスの国境をなめる、そしてまた北上し倫敦に向かうというヘンテコなルートだった。

が、3時間経った今では既にドイツフランスの国境地点に到着していた。

「改めて思うと、機動力は段違いだな」

ヘリに勝る機動力、戦闘機には速度では負けるが加速力はそれを抜く

このヘンテコなルートをヘリで行こうとすればまず燃料が無くなる最新鋭のヘリはA Aの動力を利用してるが、そんなもの作るならA Aを作ってるしな……

だが既にドイツの国境間近に迫ってる

そう、英国の領土であるドイツに迫ってるのだが

「あれは……人？でも武器とかA A持つてるし……英国の人か？」

上空500mを飛んでいてもA Aの探知システムは其れを捉えていた熱源反応で人が3人、そしてA Aも3台有ることを認識した

「一応信号を送るか」

英軍で使われる信号弾を発射する。

それに気付いたのか、A Aに奴らは乗り込む。

そして、上空でご挨拶…なんてことは一片も無かった。

上昇してくる3機の機体がそれぞれ持つアサルトライフルで射撃してくる。

それらの殆どはそれで当たらなかったが2、3発装甲に直撃する、
が当たった弾は弾かれた。

無線を外線にして目の前の3機に忠告する。

「我が機体は英国軍の機体だ。貴殿らは英国に武力攻撃を仕掛けた、
一国を相手に回すつもりか？」

「わりいが俺らの国は無くなったんだよ！何処かのイギリスって国
に滅ばされてよ！やっちまえ！相手は一匹だけだ！」

中央の機体がこの戦いに置ける司令官だろうと認識して猛然と殴り
かかった。

当然、相手もそれぞれ銃を乱射してくる。

それを俺は防ぐ手段がない、が先程の一撃で弾丸は装甲を通るどころか凹ますことも出来なかった。

威力も少なく、恐らくだが相手は6代機、対して此方は王が寄越した機体だ、最新鋭とは行かないが8、9代目の機体だろう。勝機は十分、殴ってコックピットに衝撃を通せば勝てる！

ブーストを全開にして迫る弾丸の雨に身を躍らせる。

距離は着々と縮んでいく、100、70、50、40…。

だが距離が近づけば近づくほど弾丸の威力も強くなっていく、強力な一撃を放っている左右の連中に意識を傾ける
すると右手と左手にナイフが出てくる。

手首から出てきたのかは分からないが幸運に感謝する。
目を細める、そして、呼吸を止める。

狙うはコックピット。

右手のナイフを閃光のごとく放つ！

ナイフの行方を気にせず左の機体に左手のナイフ一本で迫る弾丸の内、頭に当たりそうなものを切り捨てる。

「な、なんだこいつ！最新に乗ってるし、ば、化け物だ！」

接近されては勝てないと考えたのか、背を向けて逃げる機体に追撃をかける。

ブーストの差はそのままに出た、すぐに背中にぴったりと付く距離に入る。

「う、うわあああああああああー！」

コックピット内で半狂乱になってる男の声がスピーカーから空に響く。

それに堪えて背中からナイフをコックピットのありそうな所に突き込む、そして右足で背中に蹴りをくれる。

そのまま爆発して四散する機体から視線を外し、最後まで棒立ちだった中央の機体に握った左のナイフを投げる。

「畜生！あいつら使えねえ！俺がやってやる！此れを盗んで売れば一生遊んで暮らせるんだ！てめえなんか邪魔はさせねえ！」

飛来するナイフを避けて司令官は銃を乱射する。

「戦う理由としては最低だな！」

それをもはや脅威とは見なさなかった。

左手のナイフを縦横無尽に振り続ける、今ならなんでも切れるかも知れないと錯覚させるほど、簡単に銃弾はその目に捉えられた。

やがてカチツ、カチツと無機質な音が鳴らされた。

それは敗北の鐘であったのかも知れない、だがそれすら今は関係なかった。

「うおおおおおおおおお！！！」

負けを認めきれなかった男はただ作戦もなく、機体を接近させる。それを黙って見る、ナイフは弾丸を切り続けてボロボロ、接近してくれるならありがたい。

そして渾身の右ストレートが男の操作で放たれた。

直撃すれば装甲は凹ませれるだろうが黙ってやられる気にもなれない。

右手でその伸びきった腕を掴んで左肩の方に引っ張る。

当然体勢が崩れる、そこに無慈悲な左肘の一撃が機体の頭に打ち込まれる。

金属と金属の堅い音が再び打ち鳴らされた。

頭にもろに一撃をくらい、視界が遮断された機体のコックピットに右アッパーが叩きこまれた轟音であった。

中は既にぐしゃぐしゃ、生存を確認するまでもない。

既にブースターも活動してない機体を放り捨て、俺は勝利の余韻と殺人の罪惡に浸った。

第三射 戦闘（後書き）

最後の司令官的な人普通の人なら絶対死んでいます。

第四射 到着

懐かしい記憶を思い出す。

親父がまだキリート・ペンドラゴンと名乗っている時で、俺がウーサーと呼ばれていた時の記憶だ。

きっとこれは夢だろう、親父が振るった拳も、それを体に染み付かせた己の少年時代も、過去の振り返りだ。

親父は人気だった、子供に好かれていた。

たくさんの門弟を持っていた、俺のことは忘れている、そう錯覚させるほど熱心に、俺に背中を向けて指導をしていた。

その中でも、なぜか俺に話しかけて来る人が居た。

その他の人は路傍の石の様に、そしてまた師匠の機嫌をとろうとでも思った奴は俺を持ち上げるだけ。

だが、対等に話しかけてきた人が居た。

俺もまた、無機質に話した。

親父に好かれなくて拗ねていた、少年時代の思い出が向來した、倫敦での眠りから、俺は起きた。

「キリート・ペンドラゴン兵卒只今到着しました！」

「うむ、話は王から聞いている。君を倫敦直属特殊技団に配属する、頑張ってくれ」

「はっ！」

倫敦は過去はイギリス最大の観光地となっていたが現在はまるごと一つの軍事施設になっていた。

古代の城下町の様な賑わいを復活させた倫敦市内の時計塔最上階、そこで言い渡された命令はご存知の特殊技団への配属命令、それを受け取った後、この一室だけの豪華絢爛な部屋を黙礼で後にする。

「とりあえず……………特殊技団の部屋に行くべきだな」

目に悪い光を見ないようにしながら狭い倫敦市内を走りまわることにした。

.....。

「見つからん……」

約3時間、市内を走り回ったが見つからない。
見当もつかない場所を見つけるのだ、1時間2時間では見つからないだろう、
そう考えていた3時間前の自分が懐かしい。

「これは一度時計塔に戻るべきか……？」

「キリート・ペンドラゴン」

「え？」

突然掛けられた女性の声に一瞬混乱する。

そして同時に反射的に振り向いた顔は確実に女性の顔を捉えていた。

長いまつげ、整った顔立ちそして真っ直ぐ伸ばした可憐な金髪、ブランド物の茶色いコートを羽織った女性、身長は俺と同じくらい。
視線が交錯する一瞬で観察を終える、目の前の女性に不自然じゃないように話を切り出す。

「どちら様ですか？美しいレディ」

仰々しいアクションと共に目の前の女性に挨拶をする、此処はイギリスの首都ロンドンだ、こんな事日常茶飯事だろう。

周囲を歩く紳士の顔がぴくりと動く、だが紳士、下心はおくびにも出さない。

これぞ紳士の鑑だ…が、鼻の下が伸びてる辺り、未熟だということがよくわかる。

「失礼、こちらへ」

その紳士の視線も気にしない剛毅な気質なのか、美しいレディはあろうことか俺の右手を掴んで強い力で引っ張るだけだった。

ぎりぎりと言だ寒さ抜けぬ春のイギリス対策にはめていた革手袋が悲鳴をあげる、これ以上虐めると革手袋が干切れる。

そう考えて俺は素直に名も分からぬレディに従うことにした。

が、イギリスの紳士（成り立て）として、淑女にエスコートしゅくふされるなど紳士の名折れ、全英国紳士に土下座をしても尚足りぬ罪になる。俺の右手を掴んでいる淑女の左手を自らの左手で包み込み体を密着させる。

これぞ英国紳士法淑女操作の術、驚きに目を開く淑女の顔を見ずにエスコートをする振りをする。

答えを聞かせよう、何故なら行く場所を知らないからだ。

往来のどまんなかで奇声を上げる事を躊躇したのか、何事もなかったかのようにエスコートされる振りをしてくれる名も無き淑女に感謝して足を揃えた。

歩くこと約30分、イギリスのと真ん中、イギリスの中心。
ついでイギリスといえば此れであり、現地の言葉でビックベンという。

当然先程の説明で分かるだろうが場所は時計塔、3時間程前に最上階から降りてきてでかい扉を開いて走りだしたスタート地点。
エスコートとも言えぬ行動にも黙って時計塔の扉を開く淑女の顔は見えなかった。

「失礼、あまりこのことを外で話すのは気が引けました、強引でしたが怪我はないでしょうか」

時計塔に入った瞬間ぐるりと体の向きを変え、俺が極めてた関節技から脱出する。

「勿論です、だが…名前を聞かせてもらっても？」

右足をそつと一歩下げる、時計塔内部は歴史的重要な物品も多く存在してるがこの際は関係ない。

一応肉体派を自称しているし、緩かったとはいえ親父直伝の関節技を簡単に脱出した手際、侮れない。
体を軽く緊張させつつ目の前の淑女に警戒を向ける。

だが簡単に目の前の淑女は俺の構えを壊しに来た。

「時計塔…人は全て払っています。戦闘は十分に可能です、それに」

威圧的な雰囲気いあつてき ふんいきが淑女から出される、この時点で目の前の女性を淑

女ではなく敵として視る。

警戒を最大級にした俺を嘲笑^{あざわら}うかのように手を天までとどけと言わんばかりに上げる。

そして抱き込む。

「ここにある物品はすべて複製です。私も本気を出せる」

「誰だか知らないが、俺みたいな兵卒相手に戦う時間は有るのか？」

「充分に取りました、念には念を入れまして」

「慎重だな」

「それに値する相手の時だけですっ！」

会話で時間を稼ぐ作戦は失敗したが距離は5 m程、距離を詰めてくる茶色のコートの敵を全力を持って対応する。

コートがたなびく、俺の視界を隠す目的と判断して左手でコートを払う。

右手で即座に宙に拳を放つ、空振りだった。

直ぐにコートの目的が分かった。

伸ばされた右腕に添えられる女性特有のしなやかで白い手が添えられる。

親父が得意とする中国武術を彷彿させる地を砕くような発勁が右腕に炸裂した。

そう思ったのは敵だった、下から突き上げる発勁を肘を曲げて挟みこむ。

地を砕く激衝も流せば脅威にすらならない、女性の細腕を右肘で挟み込んで右足で鎌の様な一撃を放つ。

だが敵も分かっていた、右手一本で体を持ち上げるといふ荒業をしかず。

直ぐに右手の拘束を外すが既に飛び立った鳥、軽やかな着地音が周囲に響き渡る。

「やるな、何処とも知れない軍人。切り捨てに使われるスパイが此れだったらその国はさぞ強かろう」

再び距離が開く、目の前の敵も、俺も、警戒をしながらじりじりと間合いを詰める。

それを阻止するためにも、口を開く。

「何が言いたいのですか？」

「こんなレベル、二大大国ぐらいしか出来ないだろう？」

「洞察力は認めましょう…が、そんなこと瑣末な事象でしょう？有るのは貴方の腕前を見るだけ！」

「妙なことを言うな！」

再び敵の足が爆ぜる、先程の比にならぬ速度に感じた気持ちは

い。
凄まじい、一言で示すならその言葉しか浮かばない。

女性だが圧倒的な筋力を保有しており、尚且つ女性特有の柔軟さと中国の武術による戦闘能力の高さ、そして経験の多さ。

どれも俺を凌駕している、親父の格闘技術が無かったら瞬殺レベル

だ。

このままでは五分と持たぬ、それは相手の攻撃を受け、流し、殴りこむ両手もそれを告げており、大地を踏みしめる足も悲鳴をあげていた。

無理やり相手の蹴りを弾いて距離を開かせる。

一分の隙も無しに距離を相手は容易く置いた。

そして構え直す。

妙な感覚が体を貫いた。

敵の構えは何度も言うが中国の武術の構え、だがそれにアレンジされた部分がある。

何処か懐かしく…。

そうだな、あえて言うなら水面に張った氷を割るような衝撃を伴って、過去の記憶が再来した、と言うべきか。

鳩尾に突きこまれた硬くも柔軟さを伴った拳、その一撃にも古い記憶が込められていた。

そして、突き込んだ本人は朧気に見えた限り、笑っていた気がした。

第四射 到着（後書き）

連投連投！

どんどん消えてく書き溜めよ…

第五射 紹介

霧の都倫敦

有名なイギリス首都の代名詞とでも言つべき言葉

「じほつ、じほつ！」

咳き込んだ拍子に目を醒ます。

体を起こすとまず飛び込んだのはアンティークとも取れる数々の品。

その古臭い周囲とは一転して白さが目に痛い布団を自らの身体から剥ぐ。

「どこだ……………？どこ？」

俺自身、記憶が全くなかった。

つんと鼻を突く匂いは薬品の匂いだ。

即座に鼻を塞ぐが危険性の有無は右手にある扉が開いたことによつて証明された。

厳密に言えば、部屋に入ってきた人がなんの対策もなしに入ってきたからと説明を補足するが。

靴で足を踏み鳴らして約5m程の距離を体軀堂々とした態度で此方に寄ってくる。

顔はゴツゴツ、体もゴツゴツ、足もゴツゴツ。

正に筋骨隆々、引き締められた白い肉体がその体のデカさに輪をかけていた。

「ようこそ、特殊技団、通称British Steel Knight
sghtsへ」

だが俺の予想に反して優しい声で大木のような両うでを広げて扉を指した。

そして白人の巨漢に來いと言われ、痛むからだを引きずって階段を下る。

：今だ此処が何処だか分からないまま、司令室と思しき部屋で自己紹介タイムに突入した。

「ようこそ、BSKへ。私の名前はミード！後方支援要員の一人よ」

司令室のど真ん中、司令官の座る椅子の前のテーブルで和氣藹々《わきあいあい》と会話を続けていた隊員達が新入生に気付いたのか、続々と集まってくる。

：最初に挨拶されたのは赤髪が特徴的で活発なイメージを彷彿させるまだ年端も行かぬ女性だった。
と言っても俺もまだ17歳を迎えていない、あまり声を大にして言えないだろう。

「ようこそ。俺の名前はレンドだ、あだ名はボブって言われてる、気楽に喋りかけてくれや。一応、パイロットだ」

次に来たのは体躯2mを超えようかと思わんばかりの巨体だった。先ほどベットに来た人より尚大きい、しかも体はイギリスでは珍しい真っ黒で染まっていた。
人種差別をするわけではないが黒人、というやつだろう、ボブというあだ名は似合ってるとも言えた。
仕上げにスキンヘッドで髭面だから尚怖い、会うときは気をつけよう。

「さっきも言ったがようこそ、British Steel Knightsだ、俺もパイロットだし頼むぜ」

次にのそりと出てきたのは先程の白人男性だった。

二人が並べばオセロのようだ、しかもどちらも巨漢。

黒は縦が2m超で白は横が1mを超えてそうなぐらいだ、しかも太っていない。

若い俺の心では驚嘆を隠せなかった。

それを見とがめたのか、ドヤ顔を決めてくるオセロコンビ。

そして、最後に中央の椅子から降りてきた人は

「配属おめでとう、キリート。心から貴方の配属を歓迎するよ。

そして、強くなったね、ウーサー」

過去を象徴する人の一人、そして今日俺を打ちのめした淑女だった。

時を経て

邂逅する二人

その女性の名をベディヴェア・サー・ランスロットと言った。

「ベディヴェア…？本当に？」

「ええ、この名前と私の言葉が証明してるわ」

身長は俺とより小さい、そして視線は優しいが己の体を切り取るように凝視していた。

だがそれ以上に、出るところは出たスタイルについつい生唾を飲んでしまう。

だが畏怖するは自らの戦闘技術を卓越した戦闘能力の高さ………ん？
なんかおかしいぞ、身長は俺より低い…？

疑問は矛盾に、そして腹の底に降り積もる。

だが鍛え上げた肉体と精神でそれを封殺する、肉体は関係ないが。

ここにいる全ての人とは自己紹介が終わった、俺はそう認識すると軽く辺りを見回すことにした。

司令室の形は円の形を象っていた。

英国の最大戦力の一角を担うこの部署は豪華絢爛とは程遠いが古風な趣を醸し出している。

何故時計塔にこれを作ったのか？とオセロコンビに聞くと、

「時計塔は世界的にも重要な建物の一つだ、壊すことは戦争中에서도殆どしない、すれば世界から睨まれるからな」

「それに国連も黙っちゃいない。あいつら、問題ごとがあると首を突っ込んでくるしな！」

がーはっはっはっはっはー！と二人で馬鹿笑いを周囲に響かせて何が面白いのか大爆笑していた。

その横をすらりと抜けてきたのは俺の親友？であったが今では上司と部下の関係になった悲しい運命を背負ってる女性、ベディヴェアだった。

「今日はごめんなさいね、強くなってるからついつい」

悪戯を隠しているかのように笑みを隠せない表情で俺の目の前に立つ上司

上司の言葉には敬語：それが軍の決まりだったな、なんて早くも軍の規律を忘れかけてる俺の脳みそを掻き出したいと思う衝動を抑えて丁寧^{ていねい}に返答をする。

「いえ、自らの実力不足を実感させて頂きました」

そうだ、例えば女性といえど親父の手ほどきを受けた以上、負ける訳にはいかないのだ。

親父は死ぬまで不敗を築いた拳士^{けんし}だった、俺の敗北は親父の敗北を意味する。

が、俺の少しの落胆を吹き飛ばすように飛び出た上司の言葉はこの上司をハリケーンの中に放り込ませたいという強い衝動を生む発言だった。

「ああ、それね。それは貴方の勝ちよ。…だって、私AA着込んだもの」

上司じゃなかったら殴りかかってた、女性じゃなかったら顔を殴ってた。

ふん、よかったな、命拾いだ。

……………よかった：俺、まだ人には負けちゃいないよ、親父。ほろりと涙を流して手のひらを天に掲げた。

「あら？そんなに嬉しかったの？お姉さんと戦えたこと」

なんか壮絶な勘違いをしている淑女は放っておいて気分上々で紅茶を飲みに行くことにした。

アイスランドでは珈琲だったが流石イギリス、珈琲の文字は市内では端も見なかった。

どうせないだろう、と悲観的な構えを目に付けて未だ快活な雰囲気醸し出す司令室を後にした。

ずずっ

司令室の扉を開けて右側の階段を下り続けた末のお店に…今日の癒しはあった。

いつでも何処でも時計塔の一室はこうなのだろう、アンティークだらけの部屋で、機械仕掛けの絡繰が注ぐカフェモカを飲んで舌鼓を打っている。

人っ子ひとり居ないのに軽く高校の体育館程の面積を誇っているこの休憩室は医療室も兼ねてるらしくベッドもあった。
ついでにベッドの下を覗いたがねずみが一匹しか居なかった。

「……………うまい」

コップをテーブルに置く。

たったそれだけの動作だけど、周囲には響き渡る。

配属されて初日、既に日は暮れたがこの部署には沢山の人がいるらしい。

大半は地方の部署や戦争の後衛に配属され活躍してるらしい。

ベディヴェアが言ってた。

ぽつんと一人黄昏てる俺に近寄ってくる人影が居た。

右胸には英国軍人の紋章であるEAの文字、そして濃緑とも取れる色合いをした軍服を纏う巨漢。

「ジョーズ…さんですか」

敬語をすんでのところでつける。

此処は軍であり、規律はしっかりとせなければならない。

「おう、お前、もう此処を見つけたか。どうだ？珈琲を飲んだか？」

愛想良い笑顔を顔満面に広げて近寄ってくる白人巨漢。

その右手には熱々と湯気を立てる紙コップを握っていた、あのひと《ジョーズ》と並べると紙コップが極東の料理の一つ、ヒヤヤッコなるものにしか見えない。

「飲ませていただいてます」

俺の座ってるテーブルの向かい側にどすんと座り俺の返事に満足そうにそうか、と言って紙コップを喰らう。

違った、中身を飲んでる。

「しかし、まあ、よく此処に配属になったな、自惚れちゃいないが此処は敷居が高いから新兵は来ないのが一般常識なんだが…」

「新兵は来ない…？推薦制度が有るのでは？」

「ああ、有るのは有るさ。だが、9年連続で期待の新星が初戦で死

んじゃあ王も目が当てられねえ」

「……………そんな話は聞いてません」

「極秘事項だ、と言っても此処では常識の範疇はんちゆうだな」

先ほどまで豪快に笑っていたジョーズの顔も悲しみに染まっていた。

「……………」

「なにしょぼくてんだ！お前は今まで通りに行かせねえぜ！絶対10年連続新兵死亡なんて不名誉な記録を作らせて堪るかよ！」

そう言つとジョーズはとても広い手のひらで、俺の肩を叩く。

叩いて叩いて叩き続ける。

「皆…良い奴だった…」

その音に掻き消されるように小さい声がでかい口から漏れ出した。

数分経つてから、落ち着いたのか宿舎に行くぞと言つて俺の襟首を掴んで空になった紙コップをゴミ箱に捨てた。

第六射 出撃

翌日、俺は睡眠不足だった。

部屋に不満は無かった、入った瞬間生活感のない部屋にベットが中央に一つ置かれてたのも何ら不満はない。

司令室は地下にあった、その下には休憩室兼食堂の体育館程のスペースが、更にその下に宿舎があった。

要するにこうだ。

時

計計計

塔塔塔塔塔

王の間王の間王

その他その他その他

その他その他その他

その他その他その他

その他その他その他

その他その他その他

その他その他その他

その他その他その他

地面地面地面地面地面

司令室司令室司令室司令室

食堂食堂食堂食堂食堂

宿舎宿舎宿舎宿舎宿舎宿舎
開発班開発班開発班開発班
開発班開発班開発班開発班
開発班開発班開発班開発班
開発班開発班開発班開発班

話を戻すが寝心地も良かった。

だが、殺人の罪悪が眠りを醒まさせた。

正直、こんな夜が毎晩続くなら鬱になる。

「おはようございます」

エレベーターに乗り込むと食堂から出てきたオセロコンビがエレベーターに乗り込む。

「「よう！」「」

同時に右手を上げて同じタイミングで声を出すオセロコンビ。眠い目を擦ってそれに軽く会釈をし上階へのボタンを押す。

「昨日は良く眠れたか？んん？」

緩やかに上昇を始めた狭い箱の中で黒い方…ボブがそう笑いながら言った。

だが俺の言葉も聞かずに白い方…ジョーズが逆に怒気を交えて声を荒げる。

「馬鹿野郎！三機撃墜したんだ、眠れるはずがねえだろう！」

どこからその情報を聞いたのか分からないがジョーズが正しかった、無言でジョーズに目をやって感謝の意を伝える。

「ほうほう…なんだジョーズ、気に入ったか。そうかそうか、なら俺も守らなきゃいけなくなったなあ！」

その視線を見てか、ばしばしと俺の背中をでかい手で叩いて大口を開ける。

そして狭い箱に響き渡るいつもの笑い声を上げた。

そんなこんなでボブとジョーズが互いに俺を挟んで笑いあうのをただ複雑な気持ちで佇むほかをなかった。

笑い声が消滅を辿って行くと同時に、エレベーターの扉が開く。

俺はさっさと降りてオセロコンビに目もくれず司令室の扉を開く。

一応、二人は上司なのだがそんな細かい事をきにするタマじゃないのは昨日今日の短い間で把握済みだった。

中では慌ただしく、昨日のメンバー+見知らぬ顔が動き回っていた。その中央で座るベディヴェアの顔にも焦りが滲んでいた。

「どうかしたのか!？」

ジョーズがその様子を見たのか掴みかからんばかりにベディヴェアに詰め寄る。

「王の命令でね、動くって。場所はスペイン、ポーランドよ、貴方たちも準備して」

慌ただしくそう捲くし立てると今度は俺に目を向けた。

「貴方も準備して。まだ武装は整ってないから後ろでじっとして
て」

「…………俺を子供扱いしないで下さい」

まだ直視できない顔に反論するがベディヴェアは優しげに微笑んだ。

「私にとってはまだ子供よ。ジョーズ！レンド！キリートを開発室
に連れてって」

「了解！」

「あいよ！」

オセロ二人が異常な速さで此方に来る。

そして有無を言わずに筋肉によって連れ去られた。

「ちょ、まっ、やめ、アッーーー！」

俺の叫び声が虚しく時計塔に木霊した。

暑苦しい狭い箱で下り、囚人のように大人しく開発班に入る。

開発班と言っても技術士等、延べ400人程居るというマンモス班
だ。

そして、周囲に散在するAA群も倫敦の開発班の力を誇示している

ように見えた。

俺が囚人気分も忘れて周囲のAAを見回していると後ろから技術士らしき小さい人影が此方に向かってくるのが見えた。観察も程々にしてそちらの方に体を向ける。

「パイロットの方ですね！？僕の名前はジーンです！パイロットさんに会えて感激です！」

「はあ、」

俺の予想を超える暑さぶりについていっぴき辟易してしまう。

「今丁度整備させてもらってますが…素晴らしいですね！感動する程の性能ですね！まさかこれ程とは！流石期待の新星ですね！」

「期待の新星って…やめてくれよ」

俺の心境も知らずに目の前できらきらと目を輝かせ、上目遣いで手を合わせる整備士（仮）は正に恋する乙女だ。

しかも俺の後ろで期待の新星だ！なんて事を抜かすオセロコンビに呪詛を唱えてその場を後にしようとする、が振りだした右手は厳つく黒い手によって止められた。

「おいおい、俺達も出発だ、見る、何処に帰ろうとしてるパイロットが居るんだ？なあに、俺らが守るからよ、安心してろ」

少々男に言う言葉じゃないのは構わないが守られるのは癪だ、俺は顔には出さずに不満を心の中で吐露した。

それを隠すようにジョーズが…どうやら専用機に向かうようだ、一

言「言ボブに告げるとボブは不満そうな顔と共に自らの専用機らしき黒と白のA Aに向かっていった。

俺は内心解放されたと喜びの声を高々に叫んだが正直あの二人には悪い心は抱いていない。

有るのはちよっぴりうざいという青年にはどうしようもない邪心だ、俺は悪くはないだろう。

いつの間にか整備士…というかジーンも居なくなっていることに気付いた。

ちよっぴり心が水を出したがそれも仕方のないことだ、俺は自らの専用機である赤色に向かって歩き出した。

出発にあたって、各自無線を繋ぐ。

ベディヴェアは後方での支援の為作戦を伝えるためにも無線を繋ぐ、その後ジョーズ、ボブ…そして初対面なのにテンションがとても高いことが印象に残ったスティーブとも無線を繋いだ。

「いい、貴方の役目は後方で待機して戦場逃亡を防ぐ役目よ、分かっているわね？」

「ああ、十分承知しているよ、大将」

やはり軍の中で何もしないで後ろにいるというのは駄目なのだろう、仕事を仰せつかった。

だが…やはり俺も軍人だ、後ろでじっとなんて出来ないだろう。命令違反は軍規では処罰になるからしないが絶対出世すると誓った。

ん？もしかして、ベディヴェアが意図的に俺を前線に出さないようにしている？

いやそんなことはないだろう。どこぞの権力にしがみつくと豚はそうするかも知れないが…我ながら良い上司を手に入れたものだ。

そっという考えを振り払って足を動かす。

「キリート、行きます」

ブーストを全開にして一気に翔ぶ。

この加速力と飛翔力はA Aの魅力の一つと言えるだろう。しばらくその余韻に浸っていたが一本の無線がそれを遮った。

「此方ミード、聞こえる？」

「はい、大丈夫です、感度は良好」

「敬語は止してね、既にレンドとジョーズ、そしてステイブが先行してスペインに向かっています。激しい抵抗に遭うことが予想されるわ、武装は貧弱だけど後ろから援軍が来ると連絡が入っているから万が一敵に遭遇したら持ちこたえてね」

「了解しま…了解した」

「GOOD LUCK！幸運を祈るわ、オーバー」

無線が切れる。

まだスペインには程遠い、少し景色を堪能するか。

俺は呑気にそんなことを考えて眼下の景色に意識を潜らせた。

二時間、それを見続けるのは苦痛だった。

無線が入ったことに大いに俺は喜び、飛びつくように無線を繋いだ。

だが俺の心を癒す女性ではなく、むさ苦しい男だったのは俺に後悔の念を抱かせるには十分だった。

「なに落胆してんだ、ジョーズが泣くぞ？ええ？全く、幸運な新人だな」

無線と共に見えたスキンヘッドで髭面の黒い顔はやれやれと顔を顰しかませていた。

「ありがたい幸運だ。スペインに到着している時間じゃないのか」

「新入りとは思えない言葉遣いだな。まあいい、既に到着した、だが敵の姿が見えねえ。注意して進め」

「了解」

「ああ、ったくさつさとドンパチやりてえもん…無線、切るぞ、てめえはそこで待機だ」

「レンド！来たぞ！」

「ああ分かつてる！こつちの無線切らせろ！……さて、未だ敵は来てねえが念のためそこで待機だ、いいな」

ボブの苦笑と共に無線が切れる。

何が敵は来てねえ、だ。

ここで待つ、という心は唾棄した。

援軍が来るまでに時間がどれくらいかかるのかは分からないが三人で伏兵部隊を凌げるとは到底思えないし地の利、数の利、共にあちらが優ってる。

仲間を失いたくないなら、俺はここで行くべきだ。

だが、哀しいかな軍規がそれを阻む。

だが、軍規などに心を取られ、短い間とは言え世話をしてくれた仲間を見捨てるなどそれは仲間じゃないだろう。

きっと親父もそう言うはずだ、ならば俺がやることは行つて援護をすることだ。

しかし更なる壁が阻むではないか、武器がない。

先程貧弱といったが正しくその通りだ。

アサルトライフルが一丁、装弾数は70発が二個しかない。
死地を潜るには余りにも心許ない。

だがそれでも俺は行こうではないか、仲間を守れずして…俺は大将
の上を目指すと言ったではないか、何が大將だ、何が統帥だ。

軍規破り大いに結構だ、やってやる、フルブーストで行けば十分間
に合う、行くぞ行くぞ。

右足を思い切り踏み込む、深く沈む感覚はそのままダイレクトに加
速に繋がる。

空を更に速く駆けようとした時、無線が繋がった。

しかも、その無線を繋げた主は予想だになかった人であった。

第六射 出撃（後書き）

敬語を使わないのはこの部隊だけであって決して礼儀知らずというわけではありません。

女性に敬語を使うのはイギリスの紳士として当然です。

第七射 危機

スペイン領、北東極地。

「ジョーズ！生きてるか！」

今回の任務自体、余りにも無謀だったのは否めなかった。

俺自身、それなりにはAAを扱えるしボブとスティーブのトリオでの戦場では常に勝利を収めていた、その実績を認めての作戦だった。俺も嬉しい。

だが戦場で喜怒哀楽を示すならば勝ち残ってからだと俺は思う、進軍をすること3時間足らずでスペイン領に到着した俺らは猛烈な迎撃に遭うことになった。

だが所詮小国のAA、急発展を遂げたイギリスのAAとの性能差は歴然であった。

俺らは三機にもかかわらず敵AAを悉く撃破、10機にも及ぶ最初の伏兵を全て墮とし、悠然とスペイン領に足を踏み入れた。

そこで俺らは気が抜けていたのだろう、周囲を取り囲まれ、一斉射撃を俺らは受けることになった。

だが俺らは生きるためにありとあらゆる物を使った、兵器、地形、そして隠し玉である小型ミサイルを敵地突破のために使った。

それでも、逃げ出すので精一杯であった、追撃も激しいし戦力差は圧倒的だ。

最初は逃げ切れていたがそれも限界、俺らは渓谷を挟んで敵と相対することにした。

だが…それすら無謀であったのだろうか。

突き出る岩を使い、必死に俺らは戦った、撃墜数は数十に登るだろう。

だが最初に落ちたのはスティープであった。

死に物狂いに敵を主兵装であるアサルトライフルで撃ちまくり、それも最後の足掻きで一発モロに食らえば蜂の巣になる。

脱出の有無すら確認出来ずに機体が爆散する。

涙を流すことも出来ずに唯迫る死に対して銃を撃つ。

徐々に迫るそれは、やはり回避することは出来なかったのかも知れない。

レンドの叫びに、俺は答えることは出来なかった。

副団長でも有る俺はこいつらを守らなくてはいけない、新米からベテランまで。

レンドは逃がす、そう決意して弾数も少なくなったロケットランチャーを担ぐ。

「レンド、俺が開く、構わずに行け」

「……………なあに言っただ馬鹿やろが、俺らは入った時も同じだろが、だったら出るときも一緒だろ」

俺の気持ちにすら、レンドは答えてくれなかった、思えばこんな奴だった、レンドという男は。

死地も潜った、思い残すのはあのルーキーを守ると言ったが守れなくなるくらいか。

願わくば、スティープ、脱出して生きていてくれ。

黒と白の機体は同時にその鉛が舞う戦場へと飛び出した。

間に合え間に合え間に合え間に合え！

俺は出る速度を限界まで振り絞って機体を飛ばせる。

戦場は既に目視した！後は先行したおっさんズが生きていることだけを願う。

だが絶望は戦場の手前にあった。

爆散した機体の破片…すでに原型も留めないそれを俺は見失った。

脱出の有無を確認したいという気持ちを押し殺して更に機体を走らせる。

岩陰に隠れて怒鳴りあっているが既に体はボロボロを越えて左腕は白い装甲が剥がれかかっている位だ。

一斉に飛び出して最後の足掻きをしてやろつかという衝動を必死に抑えて冷静に判断を下す。

仲間達はレンドだけだ、此処では俺が作戦を立てなくてはいけない。

もつと味方が居ればよかったんだが。

「レンド！残り弾数はどれくらいだ！？」

連発可能なグレネードランチャーの弾数は7つ、二発外せば漏れ無く殴りかかる時間がくるという計算だ。

頭を痛めてるとレンドの馬鹿な声が聞こえる。

「あと百もねえ！そろそろ殴りかかる時が来そうだなあ！」

本格的に頭痛がし始めたヘルメット内部の頭を心配しつつ遠くから砂塵巻き上げ接近する機体を確認する。

「敵の数も10を切ったぞ！死地かとおもいきやまだ生きれそうだし！」

「なにに？もつと奴さん気合出さねえか！」

「なにお前が敵を応援してるんだ！敵が来ただろうが！」

「ああん？なんだ、俺外線にしてたぜ！」

「だから言ってるんだ馬鹿！数は6だ、砂塵に隠れて攪乱するぞ、行け！」

この時を待ち望んだ！味方が来た！
叫びたくなった、必死に抑えた。

「なにい！？そうかそうか！仲間が来たか！よっしゃ！行くぞ！う
おおらああああああああっっっ！！」

だがレンドはやはりそんな男だった、俺も叫ぶ。
この時を持って、戦線は完璧にスペイン領に移った。
僅か3機で、戦線を押し上げたこの事象を、

俺らBSK隊員は誇りを持ってキリート事件と呼ぶ。

第七射 危機（後書き）

短いクオリティ低いしわかりにくいし、のだめだめな小説ですが
どうかよろしくお願いします

第八射 突撃

「ジョーズ・ワンダー副将、此処に」

「レンド・ミテック中将、此処に」

「キリート・ペンドラゴン少将、此処に」

俺ら三人、揃いもそろって正式に名乗りを上げた。

場所は倫敦の時計塔最上階、要するに王の間という訳だ。

スペインでの活躍が認められて俺は少将になったのはつい先日。

そしてスペイン領を怒濤の速さで攻略したのが昨日の夜だ。

戦死者は0名、完勝とも言える戦績の大きな理由の一つが王の出陣に伴う士気向上と近衛兵団だ。

細かく説明すると近衛兵団を含む大きな司令部は全部で7つだ。

空軍、海軍、陸軍の3つは勿論として我々が特殊技団、通称BSK、軍備開発班、そしてシュヴァルツ王の代から創設された騎士団、最後に近衛兵団だ。

余談だが騎士団の詳しい情報などは本部であっても無く、幽霊軍部として有名だ。

一応部屋が割り当てられているが時計塔の最下層にあり勇気ある人が行った時は大きな円卓一つあって他は何もなかったということらしい。

話を戻す、王の間ということは「で結ばれるものがあるあるだろう、正しくその通りで目の前には悠然と腰掛ける王の顔があった。

「うむ、良くぞ来た。ジョーズ副将、レンド中将…そしてキリート少将の三人はよくぞこの戦で誉^{ほま}れを上げた。特にキリート少将の活躍は目を眩^{めは}るものだ」

「はっ」

「そしてジョーズ副将、よくぞ耐えぬいた。レンド中将、撃墜王は君のものだ」

「「はっ」「」

「総員よくやった！後は我々に任せろ。ポーランドも陥落寸前だ、これが落ちればぐつと楽になる」

そついうとおもむろにシュヴァルツ王が立つ。

「近衛兵団が先行している、ジョーズ副将とレンド准将は倫敦^{ロンドン}で待機だ、キリート少将はポーランドに向かえ、先の戦程の活躍を期待するよ」

「「「はっ」「」」

退室しようとする俺らをシュヴァルツ王は悪戯をした子供のように無邪気な笑顔で見送った。

これがほんの半日前の事だ。

既に俺はポーランド上空を南に向け進路を取っているのだが、

「ミード、戦線はどうなってる」

「既に首都にまで及んでいるようね。数はやはりあちらですが性能は此方に分があるわ。」

後数分もすれば到着よ、今日の武装はもっぱら都内専用だから小回りが効くようになってるわ。」

その代わり、射程は短いから注意して」

「了解、キリート少将、戦場に入るぞ」

「許可をするわ。GOOD LUCK、キリート君」

歳相応の声をしているミードの声を最後に無線を切る。

雲を切り裂いて進んでいくとまず出会ったのは対空射撃、これ以上の増援は溜まった物じゃないのだろう、あちらも必死だ。

だがブースト性能は十分最新機体にタメを張れるし此れぐらいの弾幕で落ちるほど柔でもない。

着弾する衝撃を無視して落下の体勢に移る。

そのまま対空射撃を正面から落下衝撃と共にぶち壊して大地に立つ。

するとすぐにA Aがやって来る、コックピットを開けて銀色の機体を迎える。

同じようにコックピットを開けた老練なパイロットは笑みも浮かべずに口を開いた。

「こちら近衛兵団隊長、ダングだ。貴殿は特殊技団の者か？」

古強者とも言う風格を持って、ダングと名乗った男は閉じた左目と鋭い右目で睨んでくる。

その眼光に怯まぬよう毅然としてそれに答える。

「ああ、キリート少将だ。援軍にきた」

無骨な声色は俺を威圧するように響いた。舐められて捨て駒に使われたらそれこそ最悪なので敬語など一切使わない。

「……………援軍など要らぬ」

「攻めあぐねているのは事実だろ」

淡々と言葉で攻略をする。

いつの間にかこんな口調になった、目上の奴にも敬意を払えなくなったのはいつからなんだろう。

関係ないことを考えている暇はこの一瞬しか無かったようですぐに意識を戻す。

「……………単騎で何を成すのだ」

「こんな銃を使っただって城壁は落せない、対空射撃を受けても俺のやつは傷つかないし対空砲を壊して上から突入すればいいだろ」

ひらひらと全長5mの小口径アサルトライフルを振る。
それをダングは一瞥して馬鹿な作戦だとつぶやく。

「だが…いいだろう、やってみる。死んでもらっては困る、俺と何機かつけよう」

ダングはそれだけ言ってコックピットを閉めてしまう。
聞こえるはずもないが了解とつぶやいてコックピットを閉める。

「ミード、相手の兵力とかわかるか？」

「AAは30機ほどね…変ね、首都防衛には余りにも少ないけど…」

「近衛兵団が落とした機体数は？」

「50〜60機よ。ポーランドも小国だけどスペインの残党勢力も流れてるはずよ、注意して」

「了解、一旦無線を切るぞ」

「GOOD LUCK！幸運を祈るわ」

ミードの軽快な声を鼓膜に残して徐々に集まってくる機体と無線を繋ぐ。

正直言つて戦力に不安を感じる。

集まった機体は7、その内5つは量産機だ。

量産機を見下すわけではないが声が震えている者も居た。
俺より歯の根が合わさってない奴も居た。

正直見栄を張って馬鹿な作戦を提案した俺だが戦場に出たのは一回だけだ。

そしてこれからやることは随分と無茶な作戦だということぐらい分かる。

そして戦場に慣れていない軍人だから、俺は。
だから命の重さを測れると思うんだ。

「これじゃあ無駄な戦死者が増えるだけだ、ダングと…あとその
…」

そう言つて量産機と同じ灰色だが装甲が分厚い機体を指す

3機で行こう、他は対空砲を壊してからだ」

ダングにそう告げると、さつさとブーストを全開にして高度を上げる。

空を切り裂いて雲を断つ、そこから南を見れば雲の下にポーランドの首都がある。

対空射撃は脅威的であり、並の量産機では特攻して基地に触れることすら出来ないだろう。

そして量産機以外の機体であつても消耗は激しく、更に群がってくるAA群を一人で捌かなくてはいけない

だがどんな鋼鉄の城でも弱点はある。

対空砲を壊し、少数精鋭で攪乱している間に量産機による物量作戦を決行すれば勝機は見えるだろう。

だが対空砲は5つ、A A群を捌きながら潰すには些が多い。

最初に突入する機体は3機だからそれぞれ壊すとして残り2つ、弾幕は薄くなるからそれで突入してもらえばいいだろう、それで落ちる奴はどちらにせよ無理だ

頭の中でどう行くなんて考えていると横に銀色の機体が現れる。

「長年近衛兵団の隊長をやっているが…お前みたいな新人は初めてだ、キリート少将」

苦笑いらしきものを声色から感じる…無線するときに画面でないのが残念だ、今度ミードにでも頼むか。

「そいつはどうも、ダンク隊長殿」

素っ気無く返すと沈黙が当たりを包む。

そしてまた、ダンクが口を開く。

「私も久しぶりだ、このような戦場は…」

今まで王を守り、幾多の戦場を駆けてきたが……今が一番楽しい、パイロットとして戦いに臨むのだからな」

「戦いを愉悦と思うのか…？お前は」

「是、そしてその愉悦は禁じるものだ。戦いは…己がするものであり、戦いは、民のためにするものだ」

「つまり戦う時は民の為になる時だけ…ということか」

「イギリスの民の為に…、そして故郷の娘を守るために」

「難儀な性格だな」

「お前もだ、キリート少将」

やれやれと溜息をついてしまう。

ここにも軍人がいた。

俺と同じ、軍人が。

そして…こいつの生き方こそが…きつと俺の根幹を成す一部の筈だ
…きつと、

だがその続く思いは重い声によって遮られた。

「…私には娘がいてな…それが今日結婚するらしいのだ」

「……………」

「今日中に、これを終わらせて帰る」

「…………死ぬなよ」

「死なぬ、決して」

決意に満ちた声だ。

この男は強い、だからこそ聞きたい。

「なあ、ダング」

「答えよう、キリート少将」

「敵を落とした時、何を思う」

上空には大気が薄れ、クリアになった空が、それを見るようにダングは機首を動かした。
それは空を仰ぐような行動だった。

「……………まだ若いな」

ぽつりと無線に流れた声。

今度は本当に苦笑いが混ざっていた。

「人間という定義の一つでな…大事なモノがある奴が人間と呼ばれる」

「なにが言いたいんだ」

「その敵の大事なモノ…それは敵を落とした時にはくれる」

「……………」

「それを担う、はぐれぬように俺が背負う。その決意を落とした時に再確認する」

ダングはそれだけを言うとブーストを開けた。
そして、見る間に背中を小さくしていく。

「それが…私の思いだ」

最後に無線が繋がった。
それを聞いて、俺もその背中を追いかける。

考え方も、何もかも、俺とは違った。

ブーストを全開に、どこまでも速くポーランド首都基地に飛び込んでいく。

鉛弾がカーテンを広げる弾幕に身を躍らせた。

第八射 突撃（後書き）

突撃時のダングとキリートの装備は700口径ショットガンです。アサルトライフルは不向きと認識してショットガンに変えました。

第九射 撃墜

「うおおおおおおおおお！！！！」

ガコンッ！

赤色の機体の右腕が此方を殺そうと銃を構えた黒色の機体の首を殴り飛ばす。

ポーランド首都基地はありとあらゆる所に対空砲から対地砲、AA専用のガトリング砲まで何でもありの軍用基地だ。

「対空砲破壊したぞ！」

ついに二桁の機体を殴り、ショットガンで撃ち、唯破壊した。こいつらにも大切なモノがあったのだろう。

背負って導くのが落とした者のケジメということだ。ダングと一緒に背負う。

「ダング！俺も破壊した！」

対空砲防衛に配置されていた5機のAAを破壊し、二つ目の対空砲を破壊した。

何故二つ壊しているのかというと量産機に乗っていたパイロットが突然逃げ出したからだ。

最後に入った無線では「俺にも大切な人が居る！こんな所で死ねないんだ！」と。

こんな所で堂々と戦える奴がそう居るわけでもなく、量産機群は上空での待機が解除されることもなく、結果俺が二つ壊すことに相成った。

「すまん、近衛兵団の尻拭いをさせてしまつて」

「気にするな」

そう言つて空を見上げると対空砲の弾の間をすり抜けながら近衛兵団のA Aが基地に近づいてくるのが見えた。

「よし、ダング、援軍が来たぞ。大勢は決したんじゃないか？」

「……………ああ、……………近衛の兵士よ！自らがイギリスの剣ということとを証明しろ！総員突撃！」

総勢30にも及ぶA Aが一方的に蹂躪していく。

圧巻なその景色は数分と持つこと無く、ポーランド最奥の司令室から白旗が掲げられたのは丁度10分後だった。

勝鬨^{かちどき}が此方の陣営で上がっている中、一人格納庫へ向かう姿を見た。

恐らくは…なんて事を思いながらその人影を追う。

「ダング、何処に行くんだ？」

追いついた所で声をかける。

周囲には何体ものA Aが並んでいた。

「娘の所に…だ」

「許可は？」

「取ってある」

少し思案をしてからダングについて行く。

「俺も作戦が終わった事だし帰る、ダングは何処へ行くんだ？」

「……イギリスだ」

「向かう所が一緒か…だったら」

「だったら一緒にいくぞ、キリート。さっさとA Aを起動しろ」

「……………了解」

仏頂面をしているダングの機体の隣、赤色のA Aに乗り込み、起動する。

そのまま、大空に飛び立った。

夜明けも近い、午前3時ほどのところだ。

しばらくしてA Aに乗ってイギリスへの進路を取って海上を翔ぶ俺の機体に無線が入った。

「ミードよ、いい知らせとすべきか悪い知らせとすべきか…とりあえず知らせとくわね、ステイプが見つかったわ。

ただ全身に傷を負ってるから戦線の復帰はしばらく無理そうみたい、イギリスに帰ってきたらあなたの位は准将よ、良かったわね」

「そうか、あと3時間程度で帰る、ベディヴェアに宜しく言っといてくれ」

「任せて、じゃあ、GOOD LUCK、幸運を祈るわ」

ミードのいつも通りの軽快な声を最後に無線を切る。
そしてダングへ無線を繋ぐ。

「ダング、そういえばシュバルツ王は守らなくていいのか？」

「無論だ、俺が居なくとも優秀な部下が俺の隙間を補ってくれてい
る、俺の出る幕など無いほどにな」

声色はやはり無骨で優しさの欠片すらなかった。

「優秀な部下ね…俺も欲しいんだがな…」

ぼそつと呟いた声は出来ればダングにも聞いてほしくなかった。

ベディヴェアの耳に入れば今の体勢に文句をつけそうだ。

突然、アラートが鳴る。

「っ！ダング！ダング！」

それと同時にダングの乗る機体にレーザー光線が走る。
ダングの灰色の機体が、爆散する。

だがその一瞬前、僅かだが脱出した人影を見つけた。
何処からの攻撃だが分からないがダングは必ず救わなくてはいい。

海に向かって一直線に落ちるダングを発見する。

高速で落下していた、パラシュートも開いていない。

高速で胸を打つ心臓の鼓動を無視してダングを左手で掴む。

それと同時にホバリング、勢いを殺す。

だが襲撃者の一撃は俺に牙を剥いた。

蒼い光線が機体の左足を削り取る。

それでバランスを崩してしまふ。

「ミード！ミード！聞こえるか！攻撃を受けている！このままじゃヤバイ！」

ミードに無線を繋ぐが応答は無い、席を外しているのかAAを弄っているのか分からないがせめて敵機を確認しないと役にすら立てない。

そして、機首を巡らせ、見た光景は。

「なん…だと…？」

一切、何もなかった。

ポーランドを東に、海上には遮蔽物はない。

陸への距離は凡そ200km、そこから紛れて撃っているのなら姿が見えないのはわかるが。

「200kmの狙撃を成功させるだと？冗談は良してくれ」

「こちらミード！どうしたのキリート君！キリート君！」

呆然と明け暮れている俺の耳にミードの声が響く。

そして俺の目に、真っ直ぐ飛来する光が映る。

分厚く、一切の攻撃から己を守ってくれた装甲を簡単に破壊し、自らの剣となってくれた赤い相棒はその身を海上に投げた。

「キリート！キリート！しっかりしろ！」

「ん……？ダングか……俺は……？」

目を開けるといつも仏頂面のダングが大いに焦っている顔をしていた。

そしてその後ろには青空が広がっていた。

「撃墜されたようだ、今お前のAAを使って無線を繋いだが応答は無しだ、今は此処でサバイバルとなるようだな」

「落とされたのか……俺は……」

「落ち込んでいる暇は無いぞ、何処に流されたのかは分からぬがイギリス領では無いはずだ、このような自然豊かな島は無い」

「今後はどうするんだ、ダング」

「島を一周して状況を探るぞ、キリート」

手を差し伸べてくるダングの助けを借りて立ち上がる。

パンパンツとズボンを叩いて薄肌色の砂を落とす。

軽く屈伸をするとダングが今度は懐から刃渡り10cmもあるうかというナイフを二本も取り出した。

「武装はあるか？」

ダングの短い問いに首を横に振る。

するとそうか、とつぶやいてナイフを一本渡してきた。

「…助けを無線で流しているが拾われるのはいつのことだか分からぬ」

「あの後…どうなった」

俺がそう問いかけると困ったように顔を顰めた。

そしてその表情のまま、口を開いた。

あの後、俺は着水の衝撃で目を覚ました。

既に見渡すかぎり、陸はなくコックピットに失礼した。

お前が呑気に気絶していたが起こすのも億劫でな、無線を流した。

それでしばらく経った後、急に流れが早くなつてな、思えばあれが海流ということだ。

あまりの衝撃に耐えれなくなり、頭を打って気絶した。

そしたらばこうなった。

余りにも簡潔な説明を聞いて呆然とするが気を取り直してそれだけか？と聞く。

答えは俺とは違って首を縦に振る事で応じられた。

A Aは中央の森に隠してきた。

赤い機体だから目立つだろうが森の中ではそうは見つからないだろうとダングが提案した。

動かすのは簡単に出来た。

左足がないので這いずるようになってしまったが隠しといた。

時刻は太陽を見る限り昼間だった、昼飯にはまだ早い。食料の調達をしようと俺の提案で決まった。

途中、洞窟を発見したがなにか怨念みたいなものを感じた為、ダングには黙っておいた。

島の大きさは長方形と見たとき縦500m、横590mで面積29km程度の島と推測できた。

歩いた感覚では殆ど長方形に近かったためきつとそれぐらいだろう。

一周を終えたダングと俺の度肝を抜いたのは茎と思われる部分がとても固く折ると中には液体が入っていた。

毒では無いか、と議論に発展したが食うもの全てが毒物ではないだろうと言い聞かせて勇気を持って俺が舐めた。

「ぐううううううおおおおお!!!」

舐めたと同時に広がる独特の風味と味、それに思わず唸る。

すると何を思ったのかダングが顔色を変えて肩を揺さぶってくる。

「おい！大丈夫か！キリート！おい！」

「心配性だな、大丈夫だ。すごい甘いぞ、まるで砂糖だ」

唸るのをやめてダングに満面の笑みをくれてやる。

呑気に気絶していた奴に騙されるお前が悪いのだよ。

「ふむ、切れ味を試してみるか」

だがダングはその冗談を挑発と受け取ったようだ、素早く腰からナイフを取り出し俺の首にあてがう。

「此方の植物でどうぞ…」

俺は素早く持っていた甘い植物を差し出した。

結局そこらへんに生えていたそれを刈り取って一度帰ることにした。

結局、収穫はそれしか無く、それを舐めて休憩を取る事になった。

第九射 撃墜（後書き）

この島は後々大事になるはずですが…きっと

第十射 脱出（前書き）

タイトル通り、無人島編終了の予感がビンビンします

第十射 脱出

入り口で目の前の男に言い放った。

「で、もう三日目だが、ダング、状況は」

そして目の前の男は顰めっ面で答える。

「芳しくないな、頼もしい副長が居るがそろそろ帰らねば戦死扱いにされるぞ」

既に三日が経った今では木を切り倒して簡易的なログハウスを建築した。

と言っても狭さは平均的な家庭の一室程度であまり大きくない、ダングは巨体とまでは行かないが体軀は良い方なので余計狭く感じた。

「三日でそれはないだろ、なんかあるのか」

「最後に残した無線がお前の言うとおり200kmの狙撃が成功したと伝える無線ならば、相当の手練だ、落とされて死んだと認識されてもおかしくはない」

「じゃあどうするんだ」

「私が聞きたいものだ、娘の結婚式は既に終わってるだろうな」

半ば諦めた声色でログハウスの片隅にどかりと座り込んだダングに見習って俺も座る。

今まで三日間、食料に困った事はなかった。

森を半分ほど行った所に甘い蜜を出すサトウキビと名付けた物が群生しており、それに集まるように果物があつた。

それでまず三日は持つし海で果物を撒けば魚が寄ってくる。

これがサバイバルだ！サトウキビを持ってればでかい虫が寄ってくるしなあ！美味かつたぞ！

ふと意識を外にやると木々で作られた粗末なログハウスの隙間から虫と鳥のさえずりが流れてくる。

沈黙に耐えられなくなり、口を開く。

「SOSの信号は流してるか？」

「三日続けてな、あまり期待しないほうがいいと思うが」

憮然と言い放たれる、取り付く島すらない。

「……………探索、してみるか」

「何の意味がある。無駄な行動は控えるのが賢明だぞ」

俺がぼつりと向こう隅に居るダングに告げるが言外に無駄だと切り捨てられる。

だが諦めない、何か行動をすれば痕跡が残る、やらないよりはマシだ。

「衛星で森がざわめいてるのが映るかもしれない、AAを海岸に置いて、それで森がざわめくということは誰かいると思われるもおかしくはないだろ」

「イギリスの目に留まれば最高だな。樂觀視をするな、最悪諸外国に見つかってみろ、殺される」

「だが…っ！」

「……………他に言う言葉は何一つないぞ」

反論すればするほど深みに嵌っていく、鋭い眼光に見据えられ、ついたじろいでしまう。

「ダングはここにいろ、俺が一人で行く」

ダングの無気力な姿を見てはいられなかった。

無精ひげはぼさぼさ、機体を縦横無尽に操作する輝きは鳴りを潜め、唯の四十歳の無職の姿に近い。

なりふりは構ってられないだろう、なにがあるとは分からないがせめてもの賭けを。

あの洞窟に向かう。

「やっぱり…毒々しいな」

森の一角に出来ている自然の洞窟が目の前に有る。

口を大きく開けたその洞窟は来るもの全てを拒むような雰囲気醸し出していた。

だが、正直言つてここに何か有るとしか思えない雰囲気も同時にあった。

ならば行くしかない、もう藁にも縋りたい気分だ。

目には決意の明かりが灯っていただろう、俺は一步、大きく足を踏み出した。

.....

「キリート・ペンドラゴンとダング・マスタールクの搜索はどうなってる」

場所はおなじみ時計塔倫敦。

そしてその最上階といえばやはり思い浮かぶであろう、王の間。

その部屋の奥に、決して余裕を崩していないシュヴァルツ王の姿があった。

「はっ、ただいま搜索部隊を編成して探していますが…」

「信号を逐一調べろ、ダングの事だ、必ずそうする」

「はっ！失礼します！」

ため息を一つついた。

やれやれ、そんな雰囲気醸しだして後ろを振り向く。

案の定、彼女が居た。

「シュバルツ王、キリートを無断でスペインに出撃させた挙句、連続でポーランドへ…分かっているのですか、まだ新兵ですよ！」

「ベディヴィア君。ギネヴィアはどうした、ここに入る邪魔をしたとは言え、殺したりはせんだろう」

「……… 答えて下さい、何故そこまで彼に執着するのですか！新兵や空軍陸軍からの大量配属も彼の隠れ蓑でしょう！」

「…… 落ち着きたまえベディヴィア君、彼をどうしてほしいんだ」

椅子に深く座り込んで、ベディヴィアに背を向けたままそう答えた。

「せめて…危険の無い所へ。彼に死なれて困るのはお互い様でしょう」

「俺は構わん、搜索をうちきってもいいんだ、対価を求めているのだ。」

逃げようとするな」

くるりと椅子を回した。

シュバルツの目が、ベディヴィアを睨む。

眼光の力は衰えていなかった、BSK隊長のベディヴィアでも太刀打ちが出来ぬであろう鋭さと強さだ。

「何を…求めるのですか」

有能な王と謳われている、まさかそういった事を要求するとは思えないがつい体が強ばってしまった。

王の要求は、それを上回る苦しみを彼女に強要した。

.....

洞窟に入るとすぐに足元に穴が出てきた。

直径10m程のでかい穴だ。

石ころを放り入れるとしばらくして音が帰ってくる。

一応底があるのを確認して降りることにした、ロープはない、己の腕だけで降りる。

しばらく岩の壁とにらめっこしていると足が硬い感触を掴んだ。

すとなんと軽い音と共に着地をして見上げる。

「高さ…軽く十は越してるよな…」

断崖絶壁は上りより下りのほうが難しいと聞かし、大丈夫だろう。そんな自己暗示をして岩に背を向ける。

そのまま腰からダングからもらったナイフを取り出す。

臆病と笑う事なかれ、蝙蝠こうもりは人を殺す、用心はするべきだろう。

だが俺のその心を見透かすように、真っ直ぐと伸びる洞窟の奥から音が響いてきた。

警戒だけは最大級に、足は思ったより遅いが着実に洞窟の奥に進むことにした。

かつんつ、と数度と鳴る石ころの音を心の中では何か有るのではないかと疑心暗鬼になる。

その躊躇の心は足を遅くする。

春も半ば、倫敦ではまだ肌寒い季節だが此処では違うようだ、じつとりと軍服の背中を汗が濡らす。

洞窟だから、なんて考えてヘルメットや丈夫なパイロットスーツを着けていなくて良かった、そんな小さな安堵を口から出す。

その時だった、今までは異質な光、反射的に息を止める。

…時たま地面に繋がる小さい穴が光をもたらししていたが、この光は違った。

オレンジを含む日光ではなく、青を含む人工の光。

短い、いつもの呼吸が再開した。

浅く速く、呼吸のタイミングより数倍速く鼓動が打たれる。

滴る汗も構わずに歩を進める。

人工の光が此方を照らす場所、その入口の端に息を潜めて屈む。

疑問疑念疑心、渦巻く気持ちを俺は必死に抑えて、ちらつとその正体を見る。

AA一機は軽く入るような高さを誇るドーム状の洞窟の中には、人の手には余るような

———
大きな金色の剣と
———

まるで飛行船の様な、金色の物体があった。

たまらず駆け寄る。

まずは剣から、地面に固く突き刺さっている剣の全長は凡そ80m
天に掲げれば光を集めるような尊い輝きを放つ様はまるで聖剣のよう
うだ。

引きぬくのは無理なのか…と数分唸ってから金色の物体…船に近寄
る。

全長を測る術は俺には無かった。

それほどまでに巨大、洞窟内に入るとは思えない大きさを誇るその
物体には、入り口らしきものがあつた。

興奮のあまり手が汗ばむ、頑丈そうな扉を開け放ってナイフ片手に
踏み込む。

そこにはどう見ても集団で運用する…要するに諸外国が喉から手が
出るほど欲しい…

そこまで考えて俺は漸く、これの正体がわかったのだ。

「空中戦艦……」

そして果然と立ち尽くす俺の目の前には、A V A R O N と刻まれていた。

[illegible]

「王よ、ベディヴィアが来ましたね」

「ふむ、君はわざと通したな。まったく、悪戯が好きなのは困ったものだ」

椅子が軋むほど高らかな笑う。

それを無感情の眼差しで見るギネヴィアに怯んだのか、うつ、と息を詰まらせて王は言葉を告げる。

「まあいい、ベディヴィアはおそらく適正ありだ、丁重に扱え。俺は蒔いた種の成長具合でも見てくるとしよう」

そう言つと椅子から立つ、だがそれを拒むかのように王の目の前に立つギネヴィア。

瞳にはやはり、無感情が刻まれている。

「我が開発班の総力を結集して作ったあれはどうなされたのですか」

「じき分かる、すぐに分かる」

「……………言つてらっしゃいませ」

王の不可解すぎる言葉を聞いて僅かに首を傾げ、道を開ける。

王は、扉を開け放った。

……………

流れてゆく緑も、青も、気にもとめずに疲れきつた体に鞭を打って走る。

目の前に人工的な木の家が出てきた瞬間、まるで体が無くなったかと錯覚するぐらい喜びが溢れてきた。

「ダング！脱出できる！脱出できるぞ！」

粗末なログハウス、一日掛けて創り上げた木の家の扉を蹴り破つて勢いそのままに飛び込む。

家の壁に止められ転がりの運動が無くなるまで待つてから、起き上

がってダングの目を見る。

空虚な瞳が希望に沸き上がっているのを見た。

「どついう事だ、キリート」

「実は…」

赫々然々《かくかくしかじか》で云々《うんぬん》かんぬんで…

「……………そうか！脱出できるか！……………だが…、二つほど問題点があるな」

一時は喜びにいつもは見せない笑顔を見せたがすぐに仏頂面に戻ってしまふ。

「一つはエネルギーの問題だろ？だったら大丈夫だ、俺の機体で歩いて行つて、それでエネルギー源ごと移植すればいい」

「そうか、ならもう一つは私が解決できる、問題は無いな」

「……………？」

「イギリスへの道のりだ、イギリスへの送信無線番号は覚えている、大事ない」

俺の純粹な疑問の念を感じてそう答えてくれたダングは今朝の無気力から一転氣力に満ちあふれていた。

「なら、なんで俺のAAを使って送信しなかったんだ？」

最後に単純すぎる質問をしたがダングは短く

「忘れていた」

と貴重すぎる赤面を見せてそっぽを向いた。

第十射 脱出（後書き）

はい、無人島といえば美人と二人きりですがそんなことはさせません。

男の赤面を見たって目が腐るだけです。が気にしないことで
ダングはすっかり入ってます

第十一射 敗北（前書き）

タイトル通り、敗北です。

主人公にライバルはつきものでしょう。

第十一射 敗北

グオオオオオオオオオオオオオオオオ

駆動音も高らかに、AA一機の収納なら余裕すぎる広大な格納庫の更にも上。

10人単位で操縦する円卓状のコックピットで総司令官が座りそうな椅子に深く腰掛けて眠りこけているのは、

「キリート！いい加減起きろ！私でもこの操縦は無茶だぞ！」

「んっ！………ダングか…疲れてんだ、寝させろ」

「馬鹿を言つな！戦闘になったら間違はなく無抵抗で落ちるぞ！英国のAAが来るまで操縦を手伝え！」

「ZZZZZZZZ………」

再び寝息安らかに眠りにつく。

ダングの顔には青筋が立っているが此処で操作を止めればイギリスへの道のりが分からなくなってしまうのは瞭然だった。

「ダング近衛隊長？キリート君はどうしたんですか？」

「構わん、案内を続けてくれ」

「構わんって………んっ！あー、今隊長とキリート君が居る場所は太平洋海上、つまりアジアと成ります、よく此処まで流されまし

たね…

その船…というべきでしょうか、それはステルスも搭載しているよ
うなのでまだ発見はされてはいませんが時間の問題ですね。

一応、AA200機を派遣しました、と言っても100近くが新兵、
残りの100も空軍陸軍の適性しかなかった連中なので練度は心配
ですね。

防衛手段はありますか？」

「さつき確認した、弾幕を張るのと…一発レーザー砲があった、大
事ない」

「そうですか。…データを受信しましたがプログラム名はAVAR
ON、自動防御や自動的な移動も可能なオーバーテクノロジーの塊
です、注意して下さいね」

「うむ、だが手勢といえば壊れてブーストも出来ぬAA一機、どう
する」

「それですが三機だけ先行させました、一機はキリート君の、もう
一機はダング隊長の機体です、クルーも乗せていますので安心して
下さい」

ダングはどっかりと椅子に身体を任せた。

自動移動に自動防御、なら安心だ。

そしてミード…といったか、彼女の名前はよく聞く、開発班切つて
の天才の上後方支援役に回れば鋭い洞察力と逆転の発想でフォロー
してくれる者だというのも。

既にぼろぼろとなった軍服を脱いで落とされた時に着用していたパ
イロットスーツを着る。

コックピットの広さは百人乗っても大丈夫だろう、しかも格納庫にはA Aを乗せるためだけに作られた場所すら見受けられた。

どんな技術を持っても未だ作ることの出来なかった空中戦艦、それがアジアにあったという時点でなんらかの陰謀を感じるが生憎、私は軍師などという大層なものではない。

すっぱりと意識を断ちきって自動操作に身を任せた。

「ダング、ダング、おい、生きてるのか？生きてるなら起きろ」

「…んむ…キリートか、なにかあったか」

「いや、特に…だが自動防御はすごいな、A Aは軽く30機は落としてる」

「……………なにっ！？見つかったというのか！」

「だからA Aが来てるんだろ…そうだ、俺らのA Aも来た、出撃するぞ」

眠い目をこすりながら身体を起こす、すると周囲には約20名ほどの人がいた。

そして私の後ろ、そこにも軍服に身を包む若い男が居た。

敬礼は硬い、起きて席を譲ると猟犬に狩られそうなさぎの様に、そう、脱兎の如く即座に椅子に座った。

それを見て私の若かりし頃はこんなものだったな…と苦い感慨を抱くと同時に、

隣でまるで先輩に叩く言葉ではない言葉を吐き続けるキリートを睨んだ。

ぴくりと体が反応しているがきよろきよろ見回して私を見る。

「ダング、あんまり悪戯はやめてくれ」

とのたまった。怒りに拳が震えるが必死に抑える。

プルプル震える私を悪戯成功で喜ぶ児童のようだ、なんてボソリとつぶやくから余計に頭に来る。

血管が二、三本千切れるだろう怒りをぶつけるべく、乱暴に支給された銀色のAAに乗り込んだ。

.....

「なに怒ってんだか…。中年によく発症する更年期障害とかいうや

つか？いや、娘の結婚式を見られなかったことによるショックで気が触れたか」

AAに乗り込んで椅子に座る、その間の動作で俺がぶつぶつ言っている、

「なに馬鹿な事を言ってる、出撃するぞ」

とダングの声が聞こえた、やべえばれたかと慌ててる内に無線が入る。

「無線で丸聞こえた、せめて無線を切ってくれ」

「了解、了解」

懇願するようなダングの声になにか迫るものを感じて口を閉じる。ハッチが開く、足を踏み込んでブーストを展開する。

今回のAAは装甲がとてゴツイ、やはりベディヴィアの仕業か、並大抵の弾を受けても大丈夫そうだ。

ブーストで飛び出す前、飛び出る勢いを利用して物陰に隠して床に突き刺しておいた剣を抜く。

「ミード！出撃するぞ！」

「了解、その剣が気になる所だけど…後でいじらせてね！GOOD LUCK！幸運を祈るわ」

ミードの千里眼を思わせる発言が鼓膜に残留する中、勢い良く浮遊戦艦から射出された。

「こちらダング近衛兵団隊長からキリート特殊技団少将へ、敵機体数は凡そ50機だ、敵国は日本だ。…ん？その手に持つてるものはなんだ？」

「拾ったんだ、あんまり気にしないでくれ。敵はやる、討ち洩らした奴と戦艦に張り付いた奴を倒してくれ」

「ふむ、その方がいいな、装甲も分厚そうだ、私が援護する。…充分に戦え」

「了解、こちらキリート特殊技団少将からダング近衛兵団隊長の通信だ、オーバー」

ダングの頼もしい言葉を背に受けて俺は何故か手に馴染む西洋の剣でまずは一機突撃してきた機体の頭から叩き斬る。

変哲もない…素材は恐らく鉄だと思われるが…剣を振り回して、数機も壊してる奴がいたら俺は遠くから撃つだろう。

相手もそれなりに優秀らしく前衛は分厚い盾を持って、後ろではひっきりなしに銃を撃ってくる。

だが、その程度の弾丸ではものの傷が付かない。

この時点で大きなアドバンテージを手に入れている。しかも剣を使っていれば一撃で落とすことが出来る。

効率が良すぎる…蹂躪とも言える行為だった。

だが…常に雑兵が蠢く戦場とは限らない、ということを見失っていた。

圧倒的な、風格が目の前に出てくる。

総撃墜数は32、消耗はほんの僅か。

冷静に、空中でホバリングする。

周囲の連中はなにもしてこない…一騎打ちをご所望のようだ。

「我が名、日本軍の佐々木と言う。主が此処で軍を散らす鬼人ぶりを発揮している猛者だな」

堂々と、白と赤を染めぬいた機体に、侍を彷彿とさせる長い剣を携えている佐々木と名乗る奴には…それ相応に答えねばならないだろう。

「俺の名はキリート、大層な武人と見た。一騎打ちが望みか」

俺の問いに頷く佐々木。

「そうだ、主を落とせばそのデカブツは陥落するだろう、主の援軍が来る前に主を落とす」

そう言い放つと空を照らす太陽を反射する、鏡のような剣を此方に向け、異国の侍はその細身な鉄板一つで俺に向かって来た。

まずは一太刀、大気を斬り裂き、鋼の円が俺の機体の首を獲りに来る。

反射で避けるが太刀筋すら見えない。

これほどの動きを可能にした機体の種を、俺はあたりをつけた。

（…最低限の装甲に最低限の武装、関節部は更に…これが二ホンの侍か）

後ろに下がった勢いを利用して更に下がる。

そしてそのまま、音を超えるブーストを以って、振り切った姿勢の侍に斬りかかる。

だが、俺は日本刀というものをまだ知らなかった。

日本刀を用いる剣術の基本中の基本、それは連撃による手数のださだ。

この時点で危機を察知するべきだった。

何もあの鋭い剣の持ち主が無防備なまま隙を見せるだろうか。

否、否、否。

右肩を見せる姿から一息に左手で握った柄を此方に押し付けるように剣を振るう。

俗に言う逆胴。

圧倒的な剣風、それを必死に避ける。

大気を足で掴み、開放したブーストを無理やり逆にし、振りかぶった剣を必死に留める。

必殺だった太刀は壮絶な努力と、意思に因って、その結果を捻じ曲げられた。

分厚い装甲を両断された。

恐怖で足が竦む、歯の根が合わない。

あの一撃は絶対の意思によって、必殺だった。

振るう本人が剣を引つ込めたから、事無きを得た、それを実感する。

そしてそれと同時に、初めて垣間見た死から目を背ける。

「……………なんのつもりだ」

空中高く舞い、僅か二太刀で俺を殺しかけた侍に、問うた。

沈黙、静寂。

侍はゆつくりと剣を下ろした。

「主は弱いな。切るまでもない」

そして更に言葉を続けた。

「まるで動きが成っていない。機体に乗って僅かか、噂は尾ひれをつけるが…予想以上にひれがついていたようだ」

「……………っ」

「出直すがいい、雑兵を斬るのに慣れた剣では、その剣も悲しいだけだろう」

「……………さ…むらい…っ！」

俺に背を向け、無防備に飛んでいく侍を、追いかけることは出来なかった。

その後、応援に来た新兵の特殊技団に因って日本軍は撤退した。

戦には勝った、だが、勝負に負けた。

落ちる夕日を、俺は呆然と見る他なかった。

第十一射 敗北（後書き）

異国の侍が強いわけではなく、隊長格はあんなものです。
雑兵は雑魚です、隊長は一線を描く、というわけですね。

あー強さはこんなものです。

諸外国の隊長とかベディヴィア（本当のAA騎乗時）>ダング近衛
隊長>近衛兵団>>レンド>ジョーズ〃キリート>>>雑兵AA>
>>>>陸空海軍。

レンドは強いですけどジョーズのほうがしっかりしてるので副長です。

キリート、改めて見ると弱いですね、覚醒を待ちましょうw

第十二射 訓練

.....

「この特殊技団、キリート班に所属になりました、スペッツと言います！よろしくお願いします！」

此方は茶髪の好青年。

「同じくキリート班所属のシュリーと申します。一生懸命やりますので、お願いします」

赤髪ツインテールの活発そうな美女。

「同じくキリート班所属のアルティです」

最後に青髪短髪の大人しそうな子…。

顔に汗がたらだらだ。

隣を見るとジョーズとレンドも汗たらだらだ。

ついにこの特殊技団が100人を超すマンモス団となり、班の小分けになったのだが…。

俺は部下を持ってないことによる初体験の恐怖に、恐らくジョーズとレンドはこの熱さにだろう、俺の汗の成分にも含まれている。

俺の班は俺を隊長…隊長らしい…隊長にした3班に分けられ、その3班にも部隊長なる者が存在する。

その3人がこの人達だというのが…。

三白眼気味に奥で此方を向いてニコニコ笑みを浮かべてるベディヴィアを見る。

（どういふ事です？こんな沢山新人を連れて…しかも貴方は辞めつつという）

（色々有るのよ、諸外国もAAの戦力を重視してきた。王のご意思よ）

（俺みたいな新人にも部下をつけることがどうかしてます）

（既に3ヶ月は経ってるわ、充分よ）

（……………）

（頑張って頂戴、期待してるわ）

（え、ちょ、まっ）

俺のアイコンタクトは途中で断絶させられた。

理由は明白、ベデイヴィアの目が完璧に外されたことだ。

ジョーズやレンドともアイコンタクトを送るがそんな器用な技術を持ち合わせているのはジョーズだけでレンドは盛大に笑って誤魔化していた。

しかもそのジョーズも新兵凡そ40人にあつという間に押しつぶされてしまった。

ため息をつこうにも目の前の3人…男女比は男1女2だ…にんか思われては困る。

行き場のない憂鬱な気持ちを発散すべく、開発班がついに開発した仮想A A訓練に足を向けるべく、部下3人にその旨を告げた。

「どうしてこうなった…」

結果は30人が一気に私僕俺拙者も！と合計33人が訓練することになった。

…なんと無駄な技術なのだろう、目の前の機械を見て…私はそう感慨深くなった。

そう思うのも無理は無いだろう、最大50人にも及ぶ同時訓練が可能というハイスペックぶりを発揮したのだから。

ええいミードめ！何をやっているのだ！

があっ！と内心で燃えていると張本人が仮想A A訓練専用機械《V
ATM》の影から出てきた。

「ミード！お前よくも！」

「へっ？何のこと？知らないよ？」

「ええいしらを切るな！お前のせいで俺の部下30人+3人と戦う
はめになったじゃないか！武器だ武器をよこせ！」

「そこでさらに言わない所は+ポイントね！」

ニコニコ笑いやがって！俺はまだ新兵の域を出ないパイロットだ
ぞ！舐めるな！

……さて、話を戻すが俺の武装はあの巨大な剣となった。
銃も撃てるは撃てるが性に合わない。

しかもミードが改造じゃあ！と剣を持っていったせいで何がなんだ
か…。

ともあれ、いい機会なのかもしれない、あの剣を振るう機会として
は…だが。

さらば！とミードはやけに機嫌よく去っていった。

そして後ろからの圧倒的な早くA Aに乗りたい！早く隊長と戦いた
い！という視線を背中に受け続けて既に耐久値がなくなり始めてい
る背中を隠すように、機械のスイッチをONにした。

視界が暗転、流転、一回転二回転、くるりと回って。

「気持ちワリイ…」

あっという間に仮想世界に飛び込む。

こんな技術があつてよく空中戦艦ができてないなと感心する。

しばらく酔いに苦しんでいると無線が入った。

「キリート君？今回の訓練は敵機33機を全て落とす事よ、敗北案件は自らの撃墜よ、それ以外は大丈夫だから安心して」

「他に何を設定するんだか…ミード、出撃するよ」

「了解。GOOD LUCK！幸運を祈るわ」

ミードのにこやかな声を鼓膜に残して、遙か遠方から飛来する機体を睨んで、

「……よし、行くぞ！」

気合を入れなおして右手の西洋剣を握りしめた。

「皆！隊列を組んで！前衛部隊は守るだけ、後衛で確実に仕留めるわよー！」

「総員準備、右翼に広がり包囲殲滅する」

「お前ら！隊長に俺らの力を見せつけるぞ！総員！電磁誘導砲用意
イ！」
レールガン

まるで雲霞の様に迫る機体凡そ33機、それらが一糸乱れぬ隊列を
組むのを見て溜息をしてしまう。

「すごいなおい…まあ、負けられないよな…」

相手はAAを操ってまだ間もないひよっこより幼い赤子だ。
日の光を受けて輝く剣を握って、

ブースト全開で隊列の真正面から食い破った。

「キリート隊長を包囲しろ！お前ら！5人で電磁誘導砲を準備！他
は俺に続け！」

「「「「「うおおおおおおお！！！！」「」「」「」

その攻撃を受けて適切すぎる行動を取る部隊もあれば、

「前衛！武装は剣だけ、横殴りに殴って止めなさい！」

「無理ッス！」

「根性見せなさい！」

「フーッッッ！！！」

隊長のムチャぶりを一身に受けて剣から真正面に相対する重装備Aも、

「裏をかいて、狙撃班。誤射を認める、射撃班、距離を取って」

混乱すること無く、戦の基本を突き進む部隊も。

あの敗北から一ヶ月、唯このV A T Mで想像訓練手相手に戦ってきた。
ペディヴィア

あの圧倒的な速射と移動技術に蜂の巣にされた、裏をかく思考能力で遠方から手も足も出ずに狙撃された、真っ向からサーベルで真っ二つにされた。

勝ちを拾うことも出来なかった、圧倒的な技量に敗北を喫する事30回以上。

寝る間も惜しんでただ没頭した。

握る西洋剣も心なしに軽い。

機械を通じて感じる感覚は変わらないだろう、人の身で振るうことの出来ぬ両手剣であるには変わらない。

だが通ずるものは有る、この剣はそれに応えてくれるだろう。

空想戦場で、一太刀まずは大上段に振るった。

.....

「…疲れるな…これは本当に…」

「お疲れ様〜」

ぐで〜と純白のテーブルに突っ倒れて未だ湯気を立てるカフェモカを啜る。

それを面白いものを見るかのようにニコニコしながらミードは座っている。

どうやらいい研究結果が出たようだ、俺には知るところもない。

「お疲れ様って、お前が仕組んだことだろうが、ったく」

「口調が悪くなってるわよ？ワザと？それとも気付かぬ内に？」

「俺も隊長になったからかな…それともあのおっさんずの口調が移ったかな…」

ぼけー、とあの笑えるオセロコンビを思い出してミードに答えていると、

「誰がおっさんだって？」

ぬつと出てくる白い入道雲を発見した。

「さらばミード！俺は命の危険を感じた！」

「まてこら」

脱出するべくカフェモ力を持って逃げ出そうとする俺の襟首を厳つい手が掴んで止める。

汗だらだらでぜんまい仕掛けのように首を後ろに向けて、

「どうしたんですかジョーズさん、相変わらず口が汚いことですね」

とのたまうと

「うるせえ、カフェモ力無くすぞ」

といいける。

まさに鬼の所業だ、為す術もなく地面に倒れる。

「カフェモ力のない世界なんて…ちぎればいいんだ…」

「キリート君を壊してはいけませんよ、ベディヴィア騎士団団長が来ますよ？」

「騎士団団長だと…？」

くわっ！と俺とジョーズが目を見開く。

だが驚愕のとは大きく根本から違うものだったが。

固まるジョーズを無視してミードの爆弾発言を追求する。

「騎士団団長…だと！？軍を止めたんじゃないのか！？なんでベデイヴィアが！」

「知らないわよ…。どうしたの、そんな」

俺の豹変ぶりは流石に怪しまれたのか逆に返される、それで頭に水をかけられたかのように唐突に頭がクリアになった。

「いや…ベデイヴィアに聞かされたのがそれだけでな…あは、はは、ははははは」

歪な笑いを響かせて誤魔化する。

それでなんでもないと思ったのか、ジョーズとミードがたわい無い世間話を繰り広げるのを瑣末な事と切り捨ててただ立ち尽くした。

そしてふと見かけた人事異動の連絡誌に

「ベデイヴィア・サー・ランスロットを騎士団団長に任命する。・・・

ス・イー・騎

「

と記載されていた。

第十三射 決意

吹きつける砂礫、広がる荒野。

この荒れた世界で、剣を持つ右手を撃ちぬかれる。

反動でよろけるが弾道から場所は分かった。

剣を取らずに二回三回左右に弾を避けながら猛ダッシュとブーストで小高い丘にたどり着く。

だが狙撃の基本は撃つたら逃げる事、既にそこには居なかった。

そして周囲にいくつもの地雷を置いて逃げていたようだ。

キュウウウウウウウンンンンン

対装甲車専用地雷が音を立てて地面を裂く。
足を壊されてしまつては為す術が無くなる、それを嫌い空中に脱出するが。

「キリート、まだまだね」

短い木霊と共に、メインカメラ頭部が吹っ飛ばされる。

一片の慈悲もなく、吹き飛んでいった頭部を嘆く時間もなく、ブーノックバックスターの力より勝る弾丸の一撃をまともに受け、体勢を崩す。

勿論、それを狙って狙撃手は撃った。

逃すはずもない。

今度こそコックピットを守る強固な装甲を撃ち破り、胸部を吹き飛ばした。

.....

「またやられたか……」

プシュウ、と小さく気圧差を感じさせる音を立てたVATMから体をよろけさせながらでる。

休憩室に設置されたそれから逃げるように歩いて食堂に向かう。

着用したパイロットスーツには丁度胸辺りに鈍痛が残っている。

このVATMではリアリティを出すため、設定の幾つかで痛みを付加することが出来る。

所詮仮想空間の訓練だ、と気を抜かれてはならないというジョーズ団長の意見により、こうなることに相成った。

初めて此処に来た時と同じで、あたりには誰もいない。

100名を超えるマンモス団になり、最大で座る席もないほどになる食堂になったが、まだ日は明けてすらない、人が居ないのも当然だろう。

…キィ。

いつものように湯気を立てるカフェモカも、そろそろアイスカフェモカにしようか、と本気で悩んでいる俺の目の前に、赤く短い鮮色が現れる。

ミード・トゥーユー、先程の訓練を見ていたのかやはりほくほく顔だ。

「なんか出来たのか…？」

だがいつにもまして機嫌が良い、良すぎて気味が悪い。

遂に憑かれてしまったか、と胸の前で十字架を切って祈りを捧げる。

「願わくば…この魂を救い給え…Amen」

「なに言ってるのよ、貴方の新機体が完成したのよ。」

まったく…他の隊員は量産型で、貴方も量産型じゃ格好がつかないでしょ」

「…ミード、なにか勘違いしてるぞ」

「……………」

「量産型だったから結果を出せませんでした…いいや違う。どん

な時でも結果を出す、それがラウン「それは駄目よ」……はい」

「でもあの赤い機体も王様直々とは言え、装甲もぼろぼろ、足はもげてる…誰にやられたのか…」

俺が量産機の素晴らしさを語ろうとしたがそれを阻むようにミードが溜息を吐きつつあの機体について語りだした。

「あのね…あの機体は最新鋭の機体なのよ？装甲なんて地球のプレートを利用した最硬とも言えるモノを使ってるのよ？」

「はあ…」

若干呆れた溜息を吐くがそれでもやまぬ口撃

「それになんといっても動力も桁違い、ブースト最大の時なんて…
………」

「成程、斯々然々ということか」

とりあえず知ったかぶる。

「そうよ、斯々然々ということよ」

ミードは眠そうにあくびを一つして目をこする。

遠い目をしたミードはその眼に何かしらの感情を宿していた。目の先を見ると荒れた大地が携帯端末によって映されていた、どうやらアジアの方の国が中国によって制圧されたようだ。

「これが…戦争なのね…」

ミードは、儚く消えそうな声で、そう告げた。

「これが…戦争か…」

ぼそりと呟いた声はミードに届くことは無いだろう、徹夜明けなのか眠りこけている。

イギリスは疲弊している。この短期間に2回の戦争が、更にこれから加速するであろう第三次世界大戦。

話によればついにロシアとアメリカが動くそうだが、益々戦火は世界に広がる。

核を巡って争った事など遠い昔、今やA Aを巡り、世界の覇権を手にするため、各国が動いている。

新兵は散り、老兵は死ぬ。

こんな世界が、既に広がっているのだ。

まるで塵芥のように掃いて捨てられる70億人もの命。

そして…

「その無垢な生命に変わって散るのが軍人…そうだろ…親父」

親父の言葉、その言葉を再確認した。

益々加速する、最早止められない、ならば一刻も早く此れを止め、命の浪費を防ぐ…それが今の俺に出来ることだろう。

ならば打ち鳴らそう、訓練を積み重ね、誰にも届かぬ高みへ登ろう。
そして最強となり、無敗の操者に……イギリスに覇権を掴み取らせる。
その盛大な祝福の音を、打ち鳴らそう。

訓練。

訓練訓練。

訓練訓練訓練。

隊の皆と戦った。

模擬戦など数えられない。

AAを使わない戦闘も訓練した。

無手で敵兵を制圧、銃火器を使って制圧。

死んではいけない、一発でも銃弾を受けたら即終わり。

決して弾に当たらず、拠点を制圧する。

AAに乗ってもそれは同じ、対空砲10台の弾幕を必死に避ける練習を何度も。

避けきけることは不可能に近い、それを無謀と知ってやり続ける。

空想の敵はベディヴィアを最初に登録されているレンド、ジョーズ、ダング、更にシュバルツ王も。

唯訓練した。

だが届かない。

有象無象の雑兵なら切り捨てた。

一握りの隊長にも互角になり得た。

だがあの侍は凌駕するだろう、あの日本人は強かった。

それに二大大国にも、侍程の実力者など掃いて捨てるほど居るに違いない。

眠る時間も惜しい、今は一時の平和、それを全て使って辿り着こう。

ありとあらゆる戦場も体験した。

全ての戦場で十全の力を発揮しなくてはいけない。

剣を学ぼう、無双の剣を。

銃もいい、だが武器は幾つあっても困ることはない。

悉くを手に入れる。

俺はそれを求める。

3ヶ月あまり、自らを追い込んだ。

今まではちよつとの才覚と親父の指導で少しだけ雑兵を片付けられるぐらいに成っていただけだ。

それを骨身にしみるほどよくわかった。

無双の騎士になろう。

ベディヴィアが入った騎士団、それはイギリスの虎の子らしい。

秘匿されるそれを出す時は最大の危機の時だけ。

それを出させぬように俺が頑張ればいいのだ。

ベディヴィアを守るため――。

キリート・ペンドラゴン。
覚醒。

第十四射 撃鉄

時計塔、地下。

「フランス・ドイツ・スペイン・ポルトガルにポーランド残る国も従順な姿勢を見せている。

では、最後の鳳、^{おおとり}ヨーロッパ制圧の締めは何処だ？

キリート副将」

以前なら、美しさと気品を兼ね備えた絶世の美女が座っていた席に、白いマシュマロが座っていた。

だが滑稽と笑うことはできない、何故なら俺の上司であり、人格や人情から考えても良人と言える人だからだ。

ジョーズの冗談めかした笑いに俺は皮肉を込めて言い放つ。

「そうですね、ジョーズ団長、綺麗な足を切り裂くのはどうでしょう、細くて綺麗な足を」

「ああ、シュバルツ王の方からもそう言われている、今回は特殊技団のみの活動となる。

要するに100人足らずで最後まで足掻いたイタリアに攻めこむということだ」

だが皮肉もなんのその、笑い飛ばすように皆に呼びかける、その様になっている呼び掛けにただ一人答えるものが居た。

「そいつはいい、ワインが飲み放題じゃねえか」

ガハハハハ、いつもの笑い声を響かせて何処から取り出したのか
ワイングラスを取り出して、

「出陣はいつだ？ A Aに此れを載せておかなきゃなあ！」

カチンとワイングラスを打ち鳴らす。

相変わらずの脳天気さで場の空気を和ませているレンドから視線を
外してジョーズの顔を見る。

するとあれは駄目だ、二度と治らねえ、とても言いたそうな顔を複雑な表情で醸し出していた。

ジョーズ部隊は気苦労が絶えないだろう、きっと、レンドの尻拭いで。

「よし、これから B S K はヨーロッパ最後の抵抗派であるイタリアに攻撃を仕掛けるぞ、総員準備をしろ！」

「了解！」「」

ジョーズの氣勢と共に B S K 本部が混沌の様相を示しだした。

「技術団！早く A A の整備をしなさい！機体が多くなったなんて言い訳しないでよ！」

「うつす！」

「パンピーは優先的に量産機を！私とジーン、それと M r / A A は

隊長格のよ！ほら、早く！」

「俺の機体どれだ！？」

「馬鹿、一号機とか書いてあるだろ、量産機なんだ、分からないに決まってる」

「俺…この戦いが終わったら隊長になるんだ」

「俺は小さいお店を開くんだ」

「俺は結婚する」

「相手いんの？」

「空想で」

「駄目だこいつ」

「漫才してる場合か！ジョーズ隊出るぞ！」

「了解！」

「レンド隊も出んぞ！一番取られんなよ！」

「押忍！」

格納庫で起きてる様々な事象、沢山ありすぎて伝えられない。

だが一つだけ言える、

「熱いな……」

「熱いですね……」

げんなりとした顔で俺とシュリーが機体に向かってしていると後ろからスペッツと歩いているのに走ってるスペッツより速いアルティが追いかけて来るのが見えた。
足を止めてアルティを待つ。

「この雰囲気……好きです！副将！」

「そうか」

スペッツの発言をスルーしてアルティとシュリーと一緒に機体に向かう。

ぞろぞろと付いて来る大量の兵士もそれに習ってAAに乗り込む。
乗ってないのはスペッツだけだが。

「キリート隊、出るぞ！」

「はい！」

合計32機のAAが俺の掛け声と同時に格納庫の天井から飛び出していく。

………スペッツはお留守番のようだ。

副将うーーーーー！待ってえーーーーー！

という声を聞いたがきつと俺にとっては些事な等級だろう、イタリ
アまでほんのすこしの時間で着く、気を引き締めて戦いに臨むべき
だろう。

俺の眼前を翔ぶジョーズ隊に合わせて編隊を組んだ。

機体の名前をコーンウォール、イギリスの原初の名から取った金色
の此れは凡そ全てにおいて最初の機体を超えているだろう。

だがさしものミードも大陸のプレートを使うということは中々出来
ず、左肩にプレートを入れることで精一杯だったそうだが、ミードが
出来ないそれを誰がやったのか…。

よって防御については量産機より少し硬い位だそうだが、ミードによ
るとそれも改善してみせると意気込んでいた。

ブーストにおいては事細かに説明してくれた。

元の形は先代の機体ブーストを使ったそうだが出力は根本から違う、
最大回転数は一分辺りに二万三千回転数、量産機の回転数が一万と
ちょっと、隊長格でも二万届くか届かないかと説明されたので、単
純計算で量産機の二倍、隊長格でも一・二倍ほどだ。

よって、動力は最高峰が確保されている、此れならばあの侍にも対
抗できるに違いない。

だがデメリットもある、エネルギーを生み出す力と使う力では圧倒

的に使う力が多いということだ。

戦闘に入ればどうやっても十分が限界、換装動力で更に戦闘時間を持続させることが出来るのだがそれも一度離脱せねばならない為、あまり頼りにすることができない。

この剣もいじられた。

解析した結果、中央に鉱石が埋め込まれていたという、しかもAAの動力源が、だ。

此れと共にあった空中戦艦AVARON共々古代の遺物としてイギリス国内で扱われているがだとしたら古代の人々は未来予知を出来る人が居たか技術力が現代より高いということだ。

此れにより、イギリスでは様々な島に探索班を出した、それで古代の遺物が出てくれば設けものだという。

よってこの剣は擬似的にエネルギーを蓄える、擬似換装動力とも言えるものになった。

結果。

前の機体より総合的に強化されたということだ、大変喜ばしい。

既にイタリア領に入り、緊張を帯びた俺に無線が入る。

……遂に顔まで見えるようになったのか、ミード。

「前方三キロ先、敵機発見。レンド部隊が攻撃に入ってます」

シュリーが極めて真面目な顔で報告してくる。

だが…、緊張があるのだろっ、強ばっているのがよくわかる。

「一度深呼吸をしてみろ、楽になる。」

自らの技量を信じる、大抵のやつには勝てるだろう」

シュリーは少し目を見開いてからまだ震えが残る声で了解、と告げて無線を切った。

少しでも戦死者が減ればいい、だがイタリアの連中をこの手でなるべく多く殺さなくてはいけないという矛盾に苛まれる。

余計な思考だとしても捨て切れないこの甘さを振り払い、まっすぐと正面を見て無線を開く。

全部で三十三個の画面が出てくる。

決意に満ちた目をした奴も居た、俺より修羅場を超えたのではないかと錯覚させるほどの目をした奴も。

そしてその全ての人が雄弁に勝利してみせると語っていた。

そいつらに語る言葉は一つ。

「いいか野郎ども…と、淑女の皆、言いたい言葉は一つだ。落とした機体を覚えていろ、殺した人の顔を覚えていろ。

それを背負え、それが出来ないのなら違う部隊に行くがいい。

俺は戦争は嫌いだ、さっさと終わらせるぞ」

「了解！」「」

「はいっ！」「」

「よし、キリート隊、レンド部隊の応援と更に来るであろう敵部隊の交戦を開始するぞ、スペッツ隊、ついて来い！他は応援に迎え！」

「了解！」

俺の掛け声と同時に一気に三十もの機体が散る。

峻烈なまでに加速された部隊の移動は眼下に広がるレンド部隊の戦いを無視し、更に地上に広がるAA部隊を見つける。

「スぺッツ、数はどうだ」

背中を舐めるような原初の嫌悪感を無視して高速で無線を開いて焦りを見せぬように聞く。

「凡そ三十、高速で地上を移動中！」

約二倍程度の数だが奇襲の上であれば行けるだろう。

常にうねり動く戦というものを見据えた上で、俺は指示を出す。

「対空レーダーの有無までは分からないが…、ジョーズ部隊に無線を入れる、俺が攪乱する、つつこめと」

「了解！」

「それ以外の奴らは俺について来い！行くぞ！」

「了解！」「」

俺の命令に迷わず付いて来る部下たち。

何も考えないようにして一気に急降下を開始する。

丁度割りこむように流れこんできた雲を切り裂いて視界を確保する。その目の前で移動するAA群の中で一際目立つ機体を、

落下の速度を二乗して右手で持った剣で叩き潰す！

見事なまでに潰れた純白の機体から目を離して次々と降り立つ部下に漸く気付いた手近なAAを横薙ぎに一閃する。

胴と足が離れた機体に更に追撃をかけるべく、上半身を更に剣で切り裂く。

脱出できたかどうかは分からない、だが今は戦場だ。

混沌の様相を見せる戦場は、昔と大して変わらない…。

ふと巡った景色に違和感を覚えながらも、既に迫ってるであろうジョーズ部隊の土煙を待った。

ガツンッ！

硬質な音を立てて容易く地面を貫いた剣に寄りかかりながら、AAの腰をおろす。

暮れなずむ夕日に照らされながら広がる眼下の景色は新緑、これからうまい蒸留酒になるであろう木を崖から見下ろして口を開く。

「何人死んだ？」

「誰も死んでませんよ…副将」

スベッツも俺に習って腰を下ろして苦笑交じりに答える。

スベッツは十九歳、俺は遂に十八歳になった。

そういうことだ…、現実とは非情だ。

だが年下にこき使われるのも癪だろうな、なんて思いながらこの部隊全員俺より年上じゃないか、と今更ながらに気づく。

「そうか…」

そのせいなのか、若干気の抜けた返事をしてしまう。

この青年、厄介なのがお節介なのだ。

…………ふう。

「副将、疲れてるのでは？」

「いや、疲れてない。気にするな」

無線で見える顔もお節介の文字がでかでかと書かれている。

「三ヶ月間、睡眠時間三時間の癖に変なコト言わないでください」

「馬鹿野郎、そういうのはラストで言うから盛り上がるんだ」

俺の冗談めかした言葉にも反応しなくなってしまった。

すこし悲しみを覚えながら明後日の方向を見る。

「スペッツは…どうして軍人になった？」

お節介すぎる性格も。

勿論優しい性格もある。

そしてまだ少年が抜けきっていない十代の青年が。

「…軍人になれば、支給金が出るじゃないですか。それが目当てなだけですよ」

あどけなさが残る顔は無表情だった…、そしてそれに…とスベッツは続ける。

「強くなれば、家族を守るじゃないですか、もう母しか家族はいないので、守りたいんですよ」

「だといって軍人になるのか…？」

俺の慟哭すら含んだその声音に何を感じたのか、怒気を交えてこちらを睨む。

「僕はそれを望んだだけです、隊長こそ、僕より年下のくせに偉そうなこと、言わないでください」

「……………」

なにも言えなかった、周囲に集う兵士達も、きっと理由があるのだろう。

何も言えず、何も出来なかった。

俺の軍人になる理由なんて、それ以上に薄っぺらいものなのだから。

第十四射 撃鉄（後書き）

いや…書きたい物がかけないという文才の無さに虚しくなります…

第十五射 二人

英国特殊技団《BSK》は更に東南に歩を進めた。

目指すは首都ローマ、一機も欠けること無く、伏兵であつた七十機にも及ぶ機体を潰した勢いは衰えること無く。

首都を防衛するべく、全兵力を集結した百五十機にも及ぶイタリア軍と相對することになった。

日も登り始めたイタリアの朝。

未だ兵力は集まつていないものの、百を越える様相を見せる要塞を眺めながら息せき切つて飛んでくる兵士を待つ。

その時は来た、斥候に出てきた兵士が死にそうになりながら帰ってくる。

AAでは目立ちすぎる、装着型も用意していない…。

なれば走るしか無いだろう、と告げたのが丁度半日前。

軽く敬礼をして汗を垂らす兵士を一瞥してから耳を傾ける。

「敵兵力は百二十前後！更に上昇の様相を見せています！」

「分かった、済まないがジョーズ大将の所へ行つて進軍を提言してくれ」

「了解！」

俺の命令を快く受けて入れてくれたうら若き兵士はそのまま大地を駆け抜けていった。

そして、

「ジョーズ大将からの命令です！敵兵力の集結を防ぐべく、総攻撃を仕掛けると」

「そうか…、そうだな、アルティには後方での狙撃を指示してくれ、シュリーとスペッツには準備をしろと伝えてくれ」

「了解！」

陸軍に所属していたのか、健脚を見せる兵士はそのまま何処へ奔走する。

小さくなる背中を見送ってから、金色に輝き、大剣を携えた機体に乗り込んだ。

ブオンツ、

轟音が地に響く。

空を飛び、地を駆ける黄金の機体は、後ろに100にも渡る機体を背負ってイタリアの首都、ローマへ飛んだ。

距離とすれば目と鼻の先、当然、俺らの襲来はイタリアは既に気付いているだろう、せつせと準備をしているに違いない。

イギリスの攻撃命令の速さは遅かった、それに加えて敵兵力の方が多、ということでは当初は苦戦が予想されるのも無理のないことだった。

実際、キリートの与り知らぬ所だが、イギリス国内の戦争研究者の一人は敗戦必死と告げ、捕らえられた。

だがその予想は大きく外れることになる。
理由は多々あった。

一つは戦いを経験していない兵士に凡愚な王の指令によるもの。

当たり前といえば当たり前か、第三次世界大戦勃発とはいえ、主戦場はヨーロッパなのではなくもつと東。

アジアの方が主戦場である。

二つ目はイギリス兵の精強さにある。

連戦連勝で尚且つ古参のジョーズ、レンド、キリートを筆頭に、それぞれの配下である兵士達。

しかもキリート隊に至っては3ヶ月間、キリートの訓練に混じりこんで戦うなど、厳しい訓練をしてきた。

錬度が高いのは至極当たり前のことだ。

他にも士気の高さ、地形の把握による攻勢の強さ、など幾つもの要因が重なってこそその戦果だった。

だが、イタリアも無抵抗というわけでも、雑兵の集まりでもない。部隊長から大将まで、総出での抵抗となって乱戦の様相を見せている。

それを俯瞰するように、静かに情勢を見つめる。
どこが手薄でどこが肉厚なのか、切り裂いたらどこが一番血を流す

か。

訓練とはいえ、30もの戦場を駆けたキリートの目は全てを映し出していた。

「うおおおおおおお！！！」

黄金の機体を操って、須らく立ちふさがる敵を切り捨てる。

ローマ中央にまで切り込んだまま孤立状態が続いているがまさに獅子奮迅を見せ、全くといいほど敵を寄せ付けることはなかった。

無線での連絡でスペッツ、シュリーの二名とそれについている兵士がイタリア勢である部隊長二名と交戦を開始したとの連絡を受けている。

吼えた喉を冷やしながら慎重に考えを続ける。

恐らくだが…俺の近くにも部隊長は居るだろう、そして…運が悪ければ大将、副大将も…。

ぞつとするが其処まで運が悪くないことを祈ろう、そうして既に事切れたパイロットを乗せた機体を飛び越えて更に中央にある王室へ歩を進めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

轟音と共に飛来した衝撃が真紅の機体を吹き飛ばす。

無論、パイロットもその衝撃を受けるが既に倒れ伏した機体が緩衝材となって彼女を助ける。

「シュリー！大丈夫か！？」

狼狽を露にした声色が深緑の機体から空を飛ぶ。

「けほっけほっ…、大丈夫よ、まだ行けるわ」

それに苦しそうにしながらも答えて体を起こす。

総勢22名、その内体を動かせる人数は2名。

そしてその惨劇を起こした張本人が悠然と、紫の機体を動かして歩み寄る。

「貴殿らは銃を使うが…教授してやろう、真の強者は剣を使う、なぜならば古代よりそれが磨かれてきたからだよ」

こっん、と片手握った鈍く輝く鉄を掲げて皮肉げに唇をゆがめるのが手に取るように分かる。

「随分と…超絶理論を垂れるんですね…！」

大分いらつきながらも…というより怒りマークを顔中に貼り付けてスベッツと足並みを揃える。

「貴殿らもこれから生き残れたら剣にするといい、私から逃げれるのは強者だからな」

「そうですか、それじゃあ僕もこれから剣にしますね」

スペッツも怒りに顔をゆがめて…、いや、逆だった。笑みを浮かべて数打ちのアサルトライフルを構える。

…違和感といえば銃口の下に異物が付いていることぐらいか。

それを、紫の機体がふと、僅かに気付いた瞬間、

にんまりと笑顔を浮かべた青年の画像がコックピットに張り付くと同時に閃光が彼の目を焼いた。

グレネードランチャー。

ジョーズが愛用するそれをアサルトライフルにつけた副兵装の一つは遺憾なくそれを発揮した。

閃光弾により視力を一時的に低下させる一番の目的は勿論、視力が無い内に攻勢に出ることだが、スペッツはそれが出来なかった。

キユイイイイン。

機械的且つ、この音の発生源をしかと確認できるならば恐怖を抱かせる音が周囲に響く。

視力の回復が何秒だか彼には分からない、けれど確信はあった。

戦闘不能にすることは可能だと、

勿論、電磁誘導砲は個人で運用するものではなく、レールガン 嘗てスペッツ隊の大部分を割いて運用した集団兵器の一つだ。

圧倒的な三次元の動きと力を秘めたAAでも一人ではとても無理だ、故にシュリーが必要だった。

足並みを揃え、後ろに倒れたA Aからそれを引っ張り出し、狙いをつける。

視力が回復した頃には、チェックメイト王手だ。

技術でも、経験でも敵わないのなら後は策戦有るのみ、スベッツは負けない、やらねばならないことがある。

今此処に、視力が回復したイタリア軍、部隊長ベスパーが見た膨大な電気を纏った砲身に、悪寒が走った瞬間、先程の閃光とは比べものにならない暴虐の光が紫光となって彼を襲った。

上半身は、無かった。
下半身は倒れ伏した。

紫は泥に塗れ、赤と緑は二足で立つ。

わっ！、と中央の王室から勝鬨が響く。

彼らの勝利もまた、大勢の勝利を決定づけるものだった。

第十五射 二人（後書き）

次回はジョーズ・レンドサイドとキリートのサイドを書こうかと思
います。

第十六射 相反

白の機体が走る。

炸裂する爆薬が更に一機破壊する。

グレネードランチャーを七発撃つたら背中に回して、ロケットランチャーを右から迫る機体に放つ。

轟音が更に鼓膜を打つ、後ろから光が交互に放たれる。

マズルフラッシュが後ろで光り輝いているのか、と特殊技団〈BSK〉大將が思い立つと同時に機体の頭すれすれに鉛弾（といっても大口径だから砲弾に近いが）が空を切る。

「危ないだろうが！なにするんだレンド！」

「ああ？ああ、悪い悪い。ほれ、奴さんのお出ましだ」

悪びれた様子もなく笑みを顔に貼り付けた状態でジョーズの後ろを指さす。

周囲の建物は崩落寸前の中、黄金の機体が無傷で直立していた。

ジョーズも足を動かして距離を取る。

——ジョーズもレンドも、武器は銃だ。

間合いこそが何よりであり、その制圧力は脅威の一言だ。

勿論、黄金の機体の主もそれを熟知していた、無言の疾駆と共に間合いを一息に詰める。

踏みしめた黄金の足が大地を蹴って加速する。

彼我の距離は70m、ブーストの恩恵を受けた黄金の機体はジョーズの機体の懐に入り込む。

滑らかな関節の動作、正しく人の動きで機体の鳩尾「ミッドセクト」に狙いを澄ましての肘鉄が打ち込まれる。

虚をついた一撃に、並のものなら反応すら出来ずに沈むだろう。

だが、右手でもったロケットランチャーが彼を救った、砲身は破壊されながらも早々に見切りをつけたジョーズは弾丸を抜き取って後ろに下がる。

黄金の機体も仕込み刀を所持していたのか、両手に淡く紅に輝く刀身を持った剣を握ってその場に立つ。

ジョーズの離脱と共に弾丸が黄金の機体を襲う。

豪雨より酷い掃射が彼に牙を剥くがなんでもないので弾を切り裂き、避ける。

更に距離が開く、外線が繋がると同時に、パイロットの顔が頭になる。

端正な顔、短く切った黄金の髪と妖しく輝く深緑の瞳がこちらを睨む。

「其の名前はモルガン・ル・フェイだ。貴殿の名前を問う！」

凜とした声が投げかけられる。

一瞬躊躇った後に、彼らは口を開いた。

銃口を向けて。

「特殊技団《BSK》大将、ジョーズだ」

「特殊技団《BSK》准将、レンドだ」

「「死ねや」」

腰から取り出したランチャーが、火を噴く。
毎分2000発の弩級アサルトライフルが牙を剥く。

「騎士の誇りすら無いというのか！」

一言言わねば済まない性格なのか、迫る弾丸に毒を吐いてから上空に逃げおおせる。

開いた視界に彼は安堵し、息を深く吐く。

名乗りと同時に攻撃を受けるとは思わなかった、心労も急激に上昇を始めている。

視界には……… にも無かった。

前方はクリア、後ろもレーダーにはかかっていない。

——直感がなければ死んでいた。

反応したレーダーに誘われるまま、背筋が凍る思いをしながらモルガンは急降下を始める。

追尾式のロケットランチャーというのは脅威だなぜなら2000年代の武装だというのに充分な威力と命中精度を誇るからだ。（アサルトライフルやグレネードランチャーは何度も進化をした結果こうなったが）

勿論、進化した武器もある、モルガンが持つレーザーを纏わせた短刀やレーザービームがいい例だ。

だがジョーズという男は周到だった。

ロケットランチャーだけでは勝てはしない、リーダーに引っかけつて避けられたり、フレアを使って誘導されてしまう。

撃つ時は、必殺の時と――、

敵を誘い込む一手のみ、彼の視界には急降下を始めた黄金の機体が輝いていた。

レンドと首を揃えてそれを眺める。

実力的にはあちらのほうが上だと分かるやいなや攻撃を開始した彼の判断はとても正しいだろう。

一発だけではない、弾倉に詰まってるだけのミサイルを放って様子を見る。

空中を縦横無尽に翔んでミサイルを避け、或いはフレアで誘導する様は演舞と見紛う美しさがあつた。

彼らはなにも感じはしない、淡々と、追い詰める。

12発、12発撃ち込んだ辺りでレンドが動いた。

宙を舞う黄金の機体に食って掛かる。

レンド、ジョーズの機体は共に10世代だ、最新鋭が12世代だからかなりの性能を誇る。

銘は無い、だが無銘といえど使える機体に変わりはない。

ブリストを全開に、イギリスの技術班が誇るアサルトライフルを手にしてモルガンと相対する。

「イギリスの流儀は名乗りと共に敵を撃つ事か！EU最強が笑わせるな！」

モルガンの顔は美少年の名残は一片もなく、憤怒の表情で歪ませ

ていた。

それに対してレンドはいつもの陽気な笑顔も豪快な気概も消え失せた表情だった。

「騎士…か、笑わせるなよ、モルガン卿。

手前の名前はよく知ってる、自らを卿と呼ぶこともな。

ジョーズだってよく知ってる………ベディヴィア大将をよくも…ッ
！」

失せた表情は怒りとなって再来した。

狂気が彼を包んだ、正に鬼、加速に加速を掛けた彼の機体は唸りを上げる。

返答など聞くまでもない、彼は唯、無言で2000発、逃げまわる鼠に撃ちこむ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッッ！！！！」

モルガンは逃げる他なかった、毎分2000発など舐めたスペックだ、今の武装を馬鹿にしてるとしか思えない。

こちらは騎士の誇りに則って剣を執った、だが今は騎士の誇りもない逃げに回っている。

モルガンの心は此処に来て絶望を一欠けら、はめられた。

救いの手は無いのか、NO2の騎士とは思えぬ思考を彼は必死に振り払った。

眩い、光。

銀を纏った機体が彼を襲う弾丸を跳ね返す。

矛盾を生ずる盾を持ったイタリア最強の騎士。

モルガ・ル・フェイ、彼の弟は最堅固の名を冠した騎士だった。

失望の、眼差し。

モルガンが何時も受け続けた慣れた眼差しが、冷ややかさを増して弟から発せられた。

「僕の手を使わせないでよ、兄さん」

冷酷に、兄を罵った。

第十六射 相反（後書き）

書き方がおかしかったようですね
すいません

第十七射 裏側

「僕が動くって余程の事だからね、本当、駄目な兄だね」

「くっ」

敵を前にして悠々と空中を浮いて兄を叱咤する。

白銀の機体…左手に機体40mを隠すような馬鹿でかい盾を、右手に青く輝く剣。

イタリア最強、最堅固のモルガ・ル・フェイを前に、空中のレンドは銃口を外さずに警戒を、ジョーズは戦況を見る他なかった。

「ゴルドランが話題のキリート隊とぶつかった、兄さんはキリートを探して殺して、それしか脳が無いんだから」

ゴルドラン…ジョーズとレンドは知る由がないが今、スベッツとシユリー相手に交戦している隊長の名を告げてさっさと行け、とジェスチャーを送る。

モルガンは黙って背を向ける。

呪詛を弟に短く呟いてそこから離脱、

「その必要はねえ！」

しようとしたモルガンの機体目掛けて上空から真紅の機体…コーンウォールが大剣片手に兜割りしながら剣を振るう。

虚を突かれながらもモルガンは両手の短刀で頭部を反射的に守った。

勿論、モルガは目もくれずに無視をしていた。

「ぐっ！貴殿はキリートだな！覚悟しろ！」

「黙れモルガン卿！ジョーズから無線で聞かせてもらった！

ベディヴィアを…脅迫した拳句、それを盾にダングや俺を狙撃させ
たってことぐらい！」

キリートの一言でモルガンの威勢の良い顔が一変した、明らかに狼
狽した表情に成り果てた。

「なっ！そんなことはしていない！俺は何もしていない！」

「黙れ！このまま落ちろ！」

聞く耳持たぬ、キリートは烈火の勢いでモルガンに斬りかかる。

抜き身の刀を思わせる激情でモルガンを圧倒した。

.....

二日前。

「ジョーズ大将？丁度探していました！王が呼んでいます、至急、向かってください！」

「王が…？そうか、今行く」

仮想訓練を終えたジョーズに飛び込んできた報せはある種の残酷さをもたらす事も知れずに、彼は従順に王の下に向かった。

「ジョーズ・ワンダー大将、此处に」

敬礼と共に入室した彼を迎えるように、シュバルツ王は手を広げた。

「うむ、良くぞ来た。

早速だがな、キリート・ペンドラゴンとダング近衛兵団団長がアヴアロンなる空中戦艦を拾ってきただろう？」

拾ってきた、というのは些か語弊が認められるが王にそんなことを言えるわけでもなく、黙って首肯する。

「その大本といえば狙撃による不時着が原因だが…犯人が見つかった。

入りましたえ、ベディヴィア・サー・ランスロット」

王の声とともに虚ろな表情で違う扉から入室して来たのはジョーズすら予想だにしなかった。

「ジョーズ大将、キリート、ダングがあそこを通ることは上層部しか知らない…そうだろう?」

傍目からは温厚な笑顔も彼の目には裏を思わせる笑顔にしか映らなかった。

道理もない、彼の心はベデイヴィアの死を思わせる言葉で掌握されていた、シュバルツはそれを見て満足そうに頷いて言葉を続けた。

「普通軍規では味方の誤射、それに加えて軍部の情報を敵に齎すというのは…死刑だろう?」

ジョーズの顔は青を通り越して白に成っていた。

「なに、君が少し良い働きをすれば」

ジョーズは理解が出来なかった。

王の笑みに込められた意図も、王の言葉の真意も。

彼は黙って頷く他なかった。

「そうだそうだ、犯人はイタリアのモルガンという奴らしいぞ。潰すほかないだろう」

退室する最後は王の笑顔で彩られた。

.....

「王よ、これ以上、キリートの出世は不可能です」

「なれば理不尽に出世するしかないだろう？」

「王よ、それでは怪しまれます」

「だったらどうしようもないことで出世だ、文句はあるまいに」

「王よ、ジョーズ大將はどうなるのですか」

「呵々、そうだな…ギネヴィア、ベディヴィア騎士団長をよべ」

「了解しました、王の意思のままに」

「さて…そろそろだな…」

ペンドラゴン、お前の希^{ねが}いは俺が叶える」

心底満足した顔で、彼は天を仰いだ。
EUの制圧を待つて世界に覇を唱えよう、退室させたギネヴィアにも目もくれずに準備を始めた。

第十八射 連動

SIDE キリート

視界が明滅を繰り返す。

彼の動きは人を超えた動きとして唯機械として、両手両足を、思考をフル回転させる。

両手で唯の鉄とは思えぬ剣を振るう。

胴を薙いで面を喰らう。

だが彼も必死だ、NO2の実力を遺憾なく発揮してその悉くを防ぎきる。

それでどころか逆に小回りの効いた紅色の剣でキリオートのコックピットに剣を突き立てようとまでする。

「死ね！死ねえ！俺が最強だ！あんな弟でも貴様でも無い！俺が！俺が最強なんだ！」

狂気、レントも見せたそれをモルガンが纏う、両の手で操る剣が軌跡を結ぶ。

右肩を突き刺す一撃、キリートは焦ること無く体を振る、そこから左手で機体の右足を斬り捨てて一撃に、反動をそのままに一回転した後クロスして一撃を放つ。

真紅の機体に傷がつく、余裕の無い表情で切り払った黄金の機体の左手を掴む。

刃は半ばで止まったがダメージはダメージだ、機体制御に気を配りながら右肩口で無理やり体当たりを敢行して距離を開かせる。

息は荒く、肩は上下に移動している。

右手を翳す、敵との距離は凡そ100、高度は充分、角度も大丈夫……判断は一瞬でくだされた。

「狙撃班、全弾奴に撃ちこめ、これ以上の消耗は避けるぞ。」

アルティの顔がコクリと小さく下に動いた。

それと同時に天を突く蒼炎の光が幾多もモルガン目掛け空を切り裂く。

都合14本のレーザーの内、唯一本、アルティが放ったと思われる漆黒の光がモルガンの右腕を灼いて貫く。

炭素と化した右腕が落ちる中怨嗟の声が空に響く。

「おのれキリートオツ！騎士の誉れは！一騎打ちの輝きを忘れたかアツ！」

既に勝ち目はあるまいに、両手で互角、戦力が半分になったであろう今では一騎打ちもクソもない。

最後の慈悲とでもいうのか、キリートは黙って背を向ける。

だが諦めない、彼は止まることは知らない。

嗚呼、この屈辱こそが彼の動力源、長年の視線に似たそれは彼を焚きつけた。

燃え盛る業火を連想させる猛撃を、キリートは見もしない。

彼は冷静さを欠いた、キリートは思考の三割をそれに割きつつレンジョーズの戦いを観察する。

キリートの背後で漆黒が光を放った、それにすら彼は意識を割くことはなかった、火を身に宿した黄金の機体は、右足は消え去り、右腕ももげた、不恰好な形で堕ちていく。

「粘土細工より不細工。」

アルティの無線で撃ち落とした戦果を聞いて両目を強く瞑る。
大勢は完璧に決まった。

NO2が落ち、敵の士気も落ちた。
高度1000mで満足気に頷いてジョーズ、レンドに加勢するべく
高度を下げた。

sideジョーズ

盾をつきだしてグレネードランチャーの一撃を完全に封殺する。
攻撃用のロケットランチャーは破壊され、追尾性のロケットランチャーも残弾は僅か。

彼の武装は両足を除いて尽きかけた。

されど彼は大将だ、力だけでも頭だけでもここまで上り詰めたわけじゃない。

協調性は彼の長所であり、その長所を引き出す頭も実力もあったから、ベディヴィアに次いで強者と謳われた時代もあった。

何かの仕掛けが施されているのか、肉厚の剣が彼を襲うが右肘で下から掬い上げてそれを防ぐ。

直後モルガの足元から滝が逆流でもしたのか、と錯覚させるほどの

物量が襲う。

それを見越していたのか、突き出した盾を下に向けてそれに飛び乗るように機体を動かす。

白銀の機体は重力を無視し、中のパイロットを重力で圧殺するほどのアクロバティックな動きで彼らを翻弄した。

だがジョーズとレンドのタッグは彼は10や20では効かない、ジョーズの一撃は陽動にもなり、必殺に成りうる物だ。
レンドの雨あられが更に降り注いだ。

だが

「…随分手間取ってますね、大将とそのコンビが僕相手に。
あまり得策では無い、僕の兄は…使えませんが実力はそれなりだ、
今のキリート・ペンドラゴンでは、敵わない。

あのササキに、見逃される程の実力差が有るというのなら。

僕は、逃げるので精一杯でしたが。」

あはは、と笑顔がこちらを微笑んでそう告げた瞬間、驚愕がジョーズとレンドを包んだ。

ササキの言葉が彼らの身体を硬直させた。

「日の本のササキ、鬼を斬りて国を護る者…奴と当たったというのか…？」

日本の代名詞、鬼人と呼ばれる彼と戦って生き残った時点で、伝説に成りうる。

「僕が出た戦陣で何時も会つのですよね…、その度守^つって、守って逃げた。

さて…兄がキリートを殺す前に、僕も…貴方達を落とすとしましよう、そうすれば…まだこの国を守る！」

驚愕に固まっている彼らに、銀の一撃が迷うこと無く、打ち込まれた。

第十九話 四散

sideモルガ

叩き込まれる銀の一撃。

コックピットに及ぶソレはジョーズの臓腑を震わせた。

口から鮮血が滴り落ちた。

だが死なない、敵の盾を両手で掴んで蹴り飛ばす。

一撃の下に殺すのを念頭に入れていたモルガは咄嗟のことに反応が遅れる。

「くっ！やりますね！」

賞賛は白の機体に、ジョーズは血反吐を吐いて尚、その戦意は全く衰えはしない。

黒の機体が更に追撃を、盾を失った騎士は逃げまわる。

戦況は僅かに変動した。

白の機体は殆ど死に体、けれどまだ動くことが出来るだろう。

黒の機体は殆ど無傷だがエネルギー消費が異様に速い、残り戦闘継続時間は少ないか。

そしてモルガ、最強の武器である盾を失ったがまだ技量としては二人を上回る、勝機は7割程。

モルガは焦る。

向こうでは、あのキリートがモルガンを追い詰めている。
キリートまで来られれば、勝機は減衰する。

騎士の誇りとして、祖国には忠誠は誓わないが、自分を認めてくれ
た王には報いたい。

一機は落とす。

確実に。

死を覚悟して、剣を一閃する。

後方では既に宮殿にイギリス軍が入り込んでいるだろう、戦火が上
がっている。

既に敗北は決定したも同然だ。

「モルガが此処に叫ぶ！

イタリアよ！負けは無い！王を守りぬけ！」

最後の叱咤。

萎えた兵士を気に掛けた怒声を身に纏い、先んじては白の機体に戦
いを挑む。

剣を、振るう。

急に弾幕が途切れた。

視界が、今まで塞いでいた邪魔がなくなって開ける。

黒の機体のエネルギー切れが、遂に始まった。

さらに速度をあげたモルガは振るった剣に全てを込める。

目の前の白い機体に、剣を叩き込んだ。

黒が吼えた。

堕ちていく最中に、白を思っ

「終わりだ、僕も、貴殿も。」

「はっ！これじゃあ助からねえ、レンドも、俺も、だったら。」

既に死んだ肉体の筈なのに。

最後のグレネードランチャーは、自らを巻き込んで、相手を殺し尽くした。

断片に、散り散りになっていく記憶は終末を告げた。

白、黒、銀。

海原に落ちることもなく、脱出のボタンも押すこともなく。
高度1000mから、その身を粉碎し、爆散させた。

それを、見てしまった。

第十九話 四散（後書き）

すいません、こうするしか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7922v/>

BSK—British Steel Knights

2011年10月8日07時16分発行